昭和６１年度

唐古・鍵遺跡

第27・28次発掘調査概報

黒田大塚古墳

第３次発掘調査概報

1987

田原本町教育委員会

遺跡空中写真遠景（北東から）

序

古代遺跡が数多くねむる奈良県は原始・古代の一中心であったことを私たちに教えてくれます。奈良盆地にあってはその山麓に巨大古墳が営まれていますが、それを支えてきた豊かな土地が国中(くんなか)でありましょう。なかでも田原本町は盆地の中央にあって、豊かな田園地帯が広がり、米づくりが始まって以来多くの農耕集落が営営と栄えてきました。唐古・鍵遺跡も弥生時代の代表的な農耕集落であります。

この唐古・鍵遺跡の調査も唐古池の第１次調査から半世紀をすぎ、第28次を数えることになりました。二十数次におよぶ調査は、ムラの範囲やムラの内容を除々にではありますが、明らかにしてきています。また、豊富で貴重な遺物群は、当時の文化の高さを示しています。第27・28次調査ではムラを囲む東側の環濠を発掘することができ、ムラの範囲をおさえることができました。

また、黒田大塚古墳は本町で唯一の前方後円墳で、三宅古墳群では二番目に大きい前方後円墳です。今年度は第３次調査として、前方部を調査することができ、古墳の全長をおさえることができました。

このような二遺跡について本書では調査概要としてまとめることができました。本書に示した調査成果が、幾分なりとも御活用いただければ幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思います。御批判、御教示を賜われば幸甚です。

今後も唐古・鍵遺跡をはじめ、田原本町内の遺跡の調査を実施していく予定であります。関係各位の御協力と御指導をお願いする次第であります。

昭和62年３月31日

田原本町教育委員会

教育長　岩　井　光　男

昭和６１年度

唐古・鍵遺跡

第27・28次発掘調査概報

例　　言

1．本書は、田原本町教育委員会が昭和61年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵所在の唐古・鍵遺跡第27次発掘調査概報であるが、第27次調査地の隣接地において水路改良工事に伴う第28次調査を実施したので併せて掲載し、遺構の関連を把握できるようにした。

2．発掘調査は、橿原考古学研究所の指導を得、田原本町教育委員会　社会教育課が実施した。現地調査は藤田三郎が担当した。

3．調査にあたっては、土地所有者である飯田正勝氏をはじめ、唐古自治会長　森田好彦・中村隆一両氏、ならびに唐古在住の方々に御理解と御協力を賜わった。記して感謝します。

4．調査補助員として、桑原久男・広川守・吉井秀夫・河野一隆・多賀茂治（京都大学）、安藤広道（慶応大学）、廣瀬克彦・豆谷和之・久山高史・三沢由美・宇野祐子(奈良大学)真鍋成史・松井慎一郎・天石夏実（同志社大学）の学生が参加した。

出土遺物の整理作業にあたっては、上記学生の他、梅原一恵、河野典子、末広真理子、福島加代子、岡坂和子、宮崎玲子の諸氏の協力があった。

5．本概報の執筆及び編集は、藤田がおこなった。

本　文　目　次

Ⅰ．は　じ　め　に …… 1
Ⅱ．第27次調査の概要
　1．調査の全容 …… 2
　2．遺構
　　(1). 堆積土層 …… 4
　　(2). 弥生時代・古墳時代前期の遺構 …… 6
　　ＳＤ-201，ＳＤ-106，ＳＤ-103，ＳＤ-105
　　ＳＤ-101，ＳＤ-102・ＳＤ-104，ＳＫ-101
　　(3). 古墳時代後期の遺構 …… 9
　　河道Ⅱ，河道Ⅰ
　3．出土遺物
　　(1). 土器 …… 10
　　ＳＤ-201・ＳＤ-106出土土器，ＳＤ-102出土土器，ＳＤ-105出土土器
　　河道Ⅰ出土土器，
　　(2). 石器・木製品 …… 18
　4．まとめ
　　(1). 遺構 …… 18
　　(2). 遺物 …… 19
Ⅲ．第28次調査の概要
　1．調査の全容 …… 20
　2．遺構
　　(1). 堆積土層 …… 20
　　(2). 遺構 …… 21
　3．出土遺物 …… 23
　　ＳＤ-101出土土器
　4．まとめ …… 25

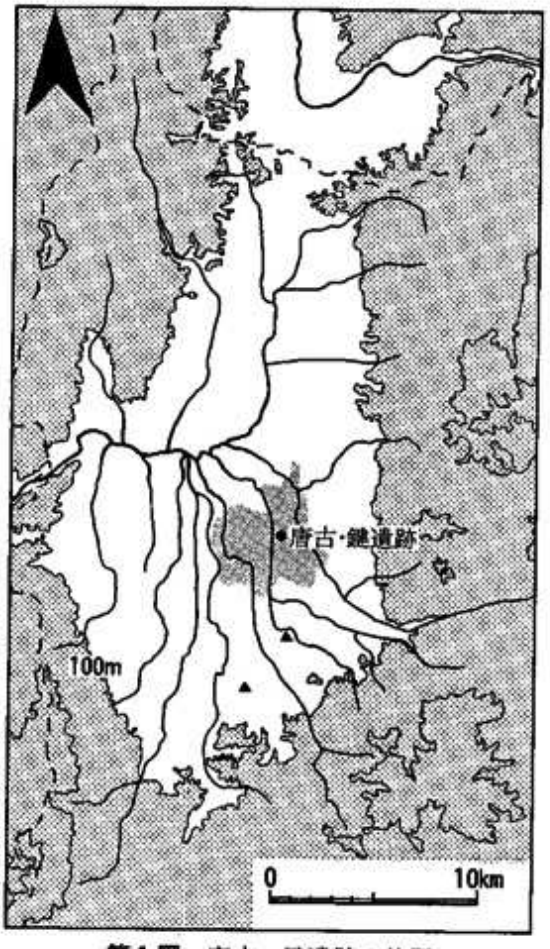
Ⅰ．はじめに

唐古・鍵遺跡の発掘は唐古池の調査から本年で半世紀を経ようとしている。また、継続調査を始めてからでは10年を数える。この半世紀の間に遺跡は国道沿線の虫食い的開発に破壊されつつも、事前調査のおかげで遺跡の範囲、その集落内容を解明しつつある。遺跡の範囲はおよそ29万㎡という大規模なものであり、ムラの範囲には環濠がめぐらされていることが判明してきた。遺構・遺物も弥生時代全期間を通じてあり、大和の拠点的集落の一つとして位置づけられている。しかしながら、史跡指定という行政的保護処置もいまだとられておらず、そのため早急に不明な範囲について調査する必要にせまられている。

第1表　本書掲載発掘地一覧表

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第27次	唐古161―2番地	範囲確認調査	水田	飯田正勝	1987.1.23～3.10	320㎡
第28次	唐古黒白地内	水路改良工事	水路	国	1987.2.5～2.10	275㎡

幸いにも昨年に引き続き、唐古在住の飯田正勝氏には発掘地の提供を受け、また、地元の方々の御理解と御協力のおかげで範囲確認調査をおこなうことができた。昭和61年度の調査は昨年度おこなった第24次調査の東側50m地点である。この場所は唐古・鍵遺跡の東端にあたる場所であり、最も範囲の不明な位置であった。これまでの調査は北西側が中心で、内容が明らかになりつつあったのと対照的に、この東側の地区は第24次調査のみであった。範囲確認調査の第27次調査では弥生時代の環濠と思われる大溝を5条検出し、ムラの推定範囲をほぼ確実なものとした。第28次調査でもこれらの溝の延長と考えられる溝を確認したので、合わせて本書に掲載することとした。遺構や遺物は少なかったものの、ムラの東端の状況を把握できたことは大きな成果といえよう。



第1図　唐古・鍵遺跡の位置

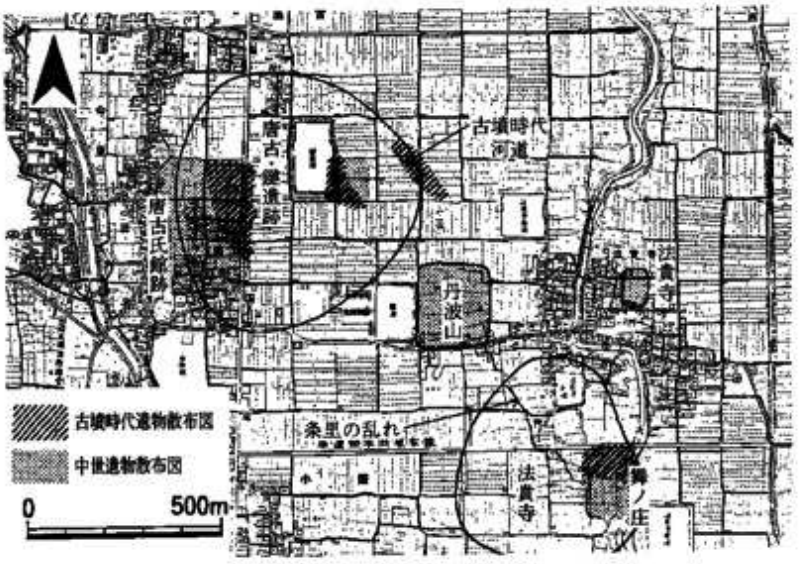
Ⅱ．第27次調査の概要

1．調査の全容

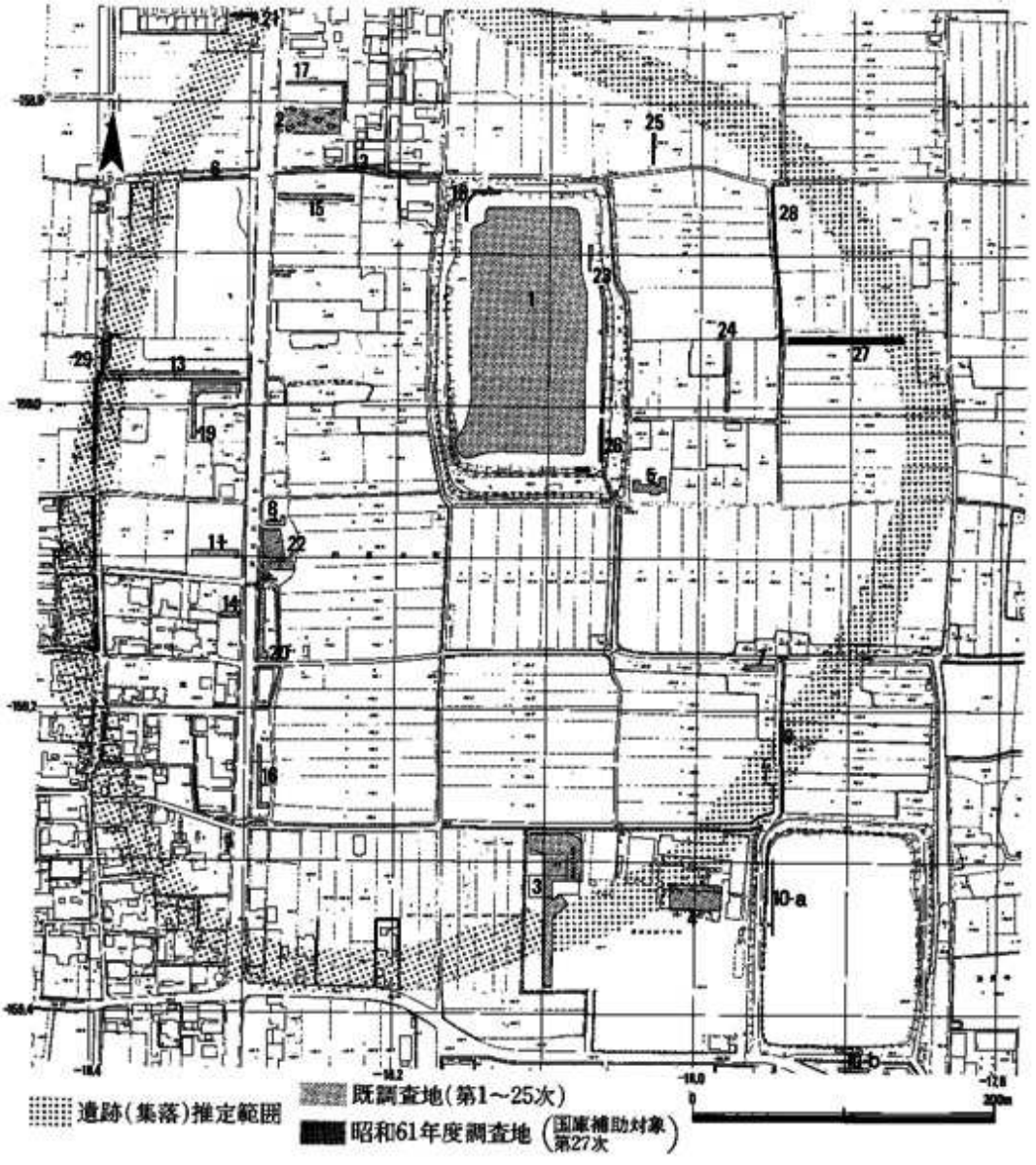
本調査地は遺跡の最も東端にあたる。この地点から東北東 500mには弥生時代後期から古墳時代前期にかけての法貴寺遺跡(志貴高校用地)、南東 300mに中世館跡の丹波山遺跡、同じく南東1kmに法貴寺舞ノ庄遺跡がある。当該地は唐古・鍵ムラの本体とこれら遺跡の中間地点でもあり、ムラの環濠推定ラインとともに各遺跡との関連も注目された。

調査は東西約80m、幅4mの東西に細長いトレンチを設定した。これは遺跡の東限をおさえるのに有効的なトレンチとなった。調査はまず、機械力をもって水田耕土層以下3・4層分の土を除去し、その後、人力による遺構検出につとめた。土地はムラ内部の土層層序とは異なるため、遺構面の把握は容易ではなかった。第3層直下において、トレンチ東半に砂層堆積がみられ古墳時代後期の河道であることは確認できたが、下層遺構面は不安定な土層堆積上にあり、遺構面の把握と検出遺構との関係を明らかにするように努めた。

その結果、基本的に三つの遺構面を確認し、中世の土坑2基、古墳時代の河道2条、弥生時代中期から古墳時代前期の大溝を7条検出した。大溝については廃土処理不可能となり、また、範囲確認調査という性格から完掘はしていない。しかし、トレンチ全面において遺構を検出したことにより、唐古・鍵ムラの範囲をおさえることができ、十分な成果があげられた。また、古墳時代の河道を検出したことは法貴寺舞ノ庄遺跡との関連も考えられ、新たな課題も出された。



第2図　唐古・鍵遺跡と周辺の遺跡分布図（2万分の1）



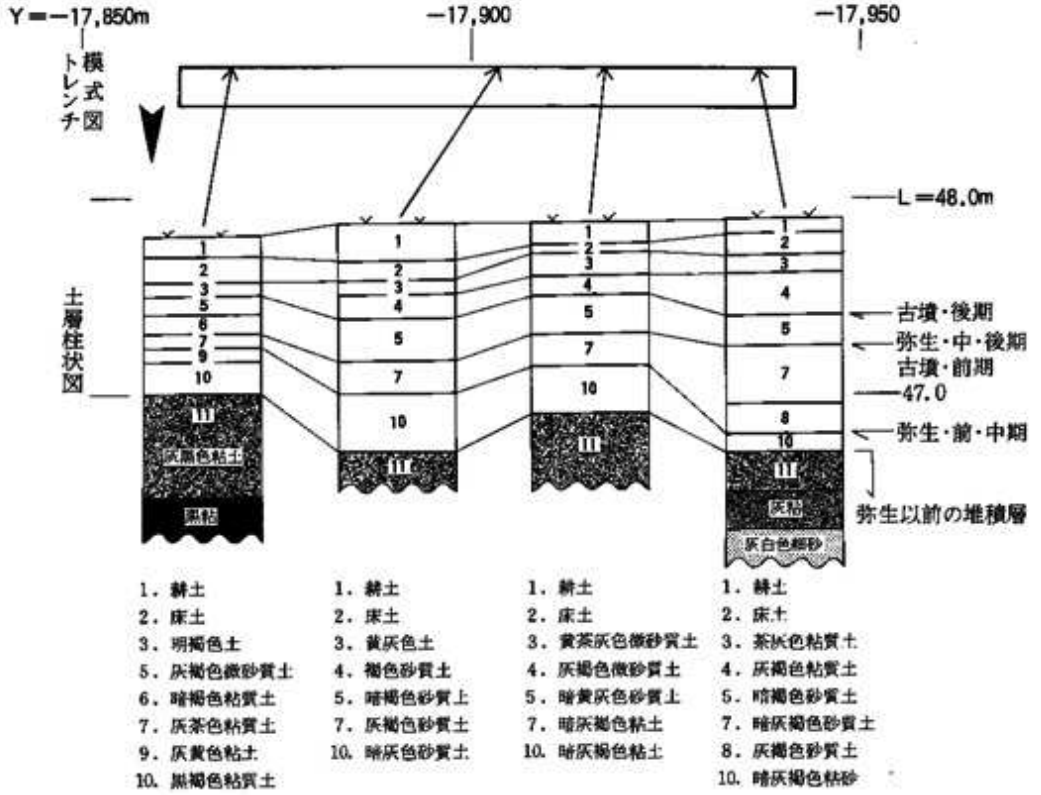
第3図　唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

2．遺　構

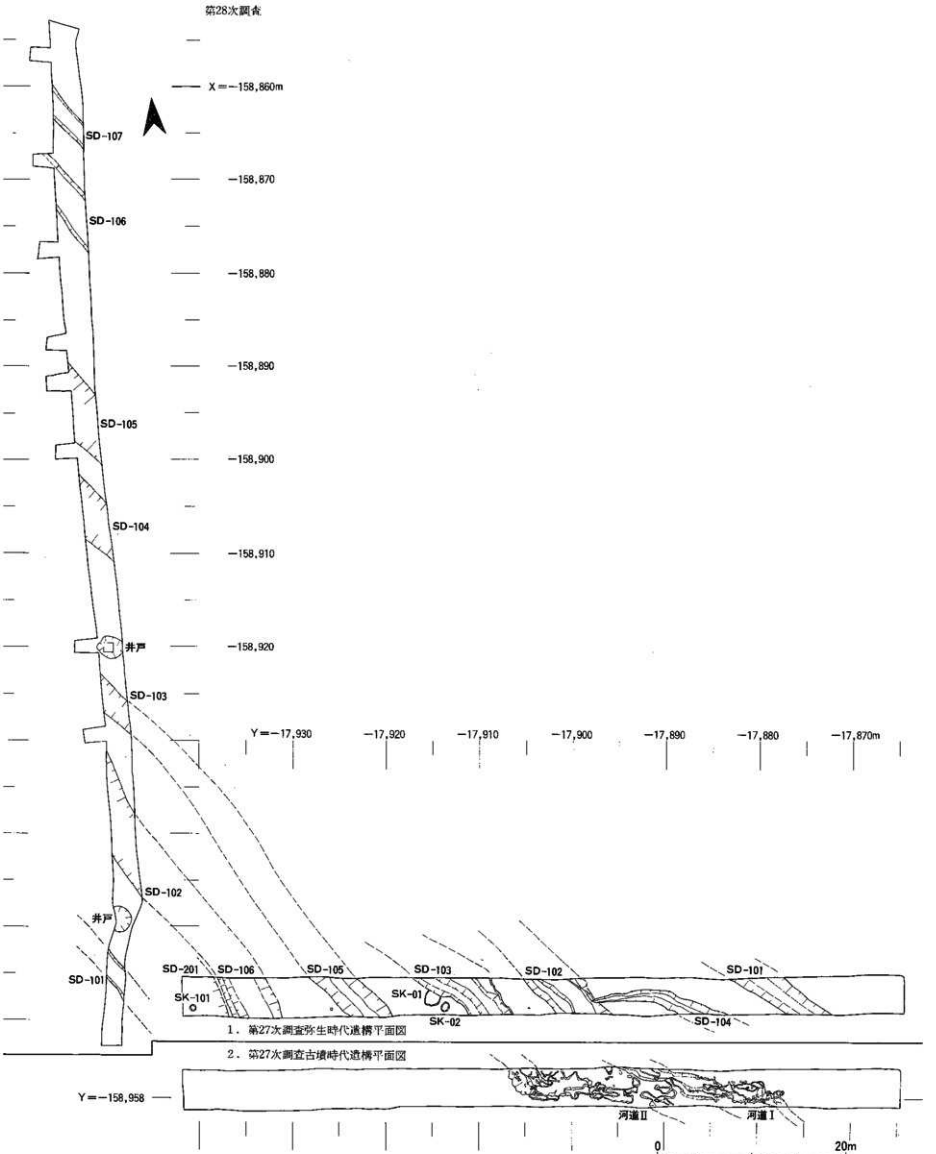
(1). 堆積土層

本調査地は東西の長さが80ｍに及び、また、遺跡地の縁辺部分にあたることから、弥生時代以降の堆積土層は一定でない。いま、第４図に比較的良好な地点を選び、土層の柱状模式図をつくって、関連をとらえられるようにした。

本地は現水田のため、水田耕土層（1）と水田床土層（2）は全面にみられたが、第３層以下については均一でなく、約10～20cmの堆積土層となる。したがって、第３層以下の土層について説明を加えることとする。第３・４層は第５層上面より中世の土坑が掘削されていることから、中世以降の洪水堆積土層と思われる。また、この第５層上面は古墳時代後期の遺構面でもある。第５層・第６層は弥生時代後期の遺構が第７層より掘削されていることから、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成されたと思われる。この第５層・第６層は砂質土であることから、この両層も同じく洪水堆積土層と考えられる。第７層上面では弥生時代中期・後期の大溝を検出している。第７層・第８層は灰褐色砂質土で、上層における砂質土層より硬い。弥生時代中期に形成された土層である。第９層・第10層上面では弥生時代前期末から中期の遺構を検出している。したがって、この両層は均一でないが、弥生前期もしくはそれ以前の堆積と思われる。第11層はトレンチ全面にあり安定している。これら層序ではトレンチ中央と西端が低く谷地形だったと思われる。



第4図　第27次調査基本土層関連図（S＝1/60）



第5図　第27次・第28次調査遺構平面図（S＝1/400）

第2表　第27次調査主要溝・河道一覧表

溝番号	規模(m) 幅	規模(m) 深度	溝底標高	走行方向	弥生 Ⅰ	弥生 Ⅱ	弥生 Ⅲ	弥生 Ⅳ	弥生 Ⅴ	古墳 前	古墳 後	主要遺物	備考
SD-201	5以上	0.8以上	—	東南東一西北西	←→							完形土器	
SD-101	3.2	1.0	46.1	南東一北西				------	↔				
SD-102									↔				
SD-103	約4	1.4	45.6	南東一北西			←→						
SD-104				南東一北西					↔				
SD-105	3.6	① 1.4	45.8	東南東一西北西			←→						再掘削
		② 0.8	46.4							↔		完形土器群	
SD-106	約5	① 0.7	46.1	東南東一西北西	←→								再掘削
		② 0.9	46.3					------	------	------	------		
河道Ⅰ	1～2	0.4		東南東一西北西							↔	完形土器	
河道Ⅱ	1～3	0.3～0.6		東南東一西北西							↔	完形土器	

(2). 弥生時代・古墳時代前期の遺構

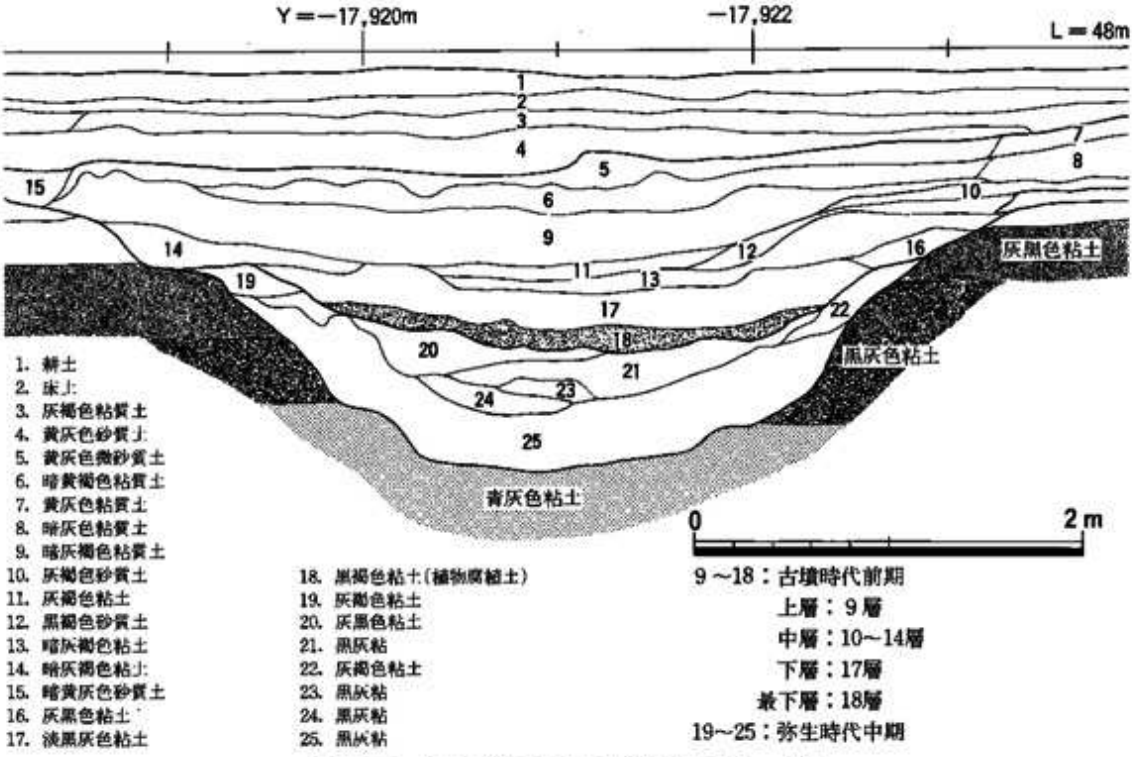
SD－201

本溝はトレンチ西端で確認した遺構である。トレンチ内に設定したサブトレンチで、土層堆積から判断したものであるため、溝であるかどうか断定できない。断面図でみる限り、幅5m以上のもので、深さ 0.8m以上を測る。溝の堆積は粘砂層・粘土層によって埋没している。粘砂層は粘土にわずか砂を混じえるもので、遺物は含んでいない。ベース層である灰黒色粘土層とは区別しにくい。遺物は本溝の最上層である黄灰色粘砂層からほぼ完形の大和型甕が、それより20cm下位の灰色粘砂層から完形の広口長頸壺がそれぞれ単独出土した。このことから溝の最終埋没が第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式にかけての頃と推察される。

SD－106

ＳＤ－106は前述ＳＤ－201の東、約0.5mで検出した大溝である。本溝は２回の掘削がおこなわれており、再掘削によって初回の溝の大半を失っている。初回の溝の規模は幅約５m、深さ0.7mを測る。溝は東南東から西北西方向へ走向する。最下層である灰黒色粘土層のみが残存していた。この層内より第Ⅱ様式初頭と思われる広口長頸壺が出土した。この溝は西側に平行するSD－201と土層の堆積状況から同時併存する可能性がある。

再掘削の溝は約0.5m遺構面が上昇してから、すなわち弥生時代中・後期の面より掘られている。規模はほぼ同じで溝幅約５m、深さ0.9mを測る。本溝は大半を灰白色粗砂層等で形成され、粗砂層内にはラミナ層が発達している。これは溝を埋める洪水堆積物と思われ、溝の東側まで及んでいる。砂層内には全く遺物が含まれていない為、時期はわからない。しかし、本溝の堆積土層を覆うように暗褐色砂質土層があり、第Ⅴ様式から布留期の土器が包含されていることから、



第6図　ＳＤ-105 南壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

再掘削の溝は第Ⅳ様式から第Ⅴ様式の一時期におさえることができよう。このような砂層堆積が後述するＳＤ－102やＳＤ－104にも存在することからもうかがえる。

ＳＤ－103

ＳＤ－103はトレンチのほぼ中央で検出した大溝である。溝幅約４ｍ、深さ1.4mを測る比較的深い大溝で、南東から北西方向に走向する溝の断面形態は二段掘りで、溝の中位にテラスをもつ。溝内の堆積状況は最下層が灰黒色粘土層で約40cmの堆積を有するが、それより上位では、シルト・細砂・粗砂層の互層堆積をなし、洪水による溝の埋没が考えられる。遺物はわずかな土器片であり、溝の時期決定は困難であるが、第Ⅲ様式の土器片が洪水堆積土層の下位で、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式頃の土器片が同層上部より出土しており、弥生時代中期後半に埋没したと考えられる。

ＳＤ－105

ＳＤ－105はトレンチの西端、ＳＤ－106とＳＤ－103の間で検出した大溝である。二回の掘削がおこなわれており、初回の溝は幅 3.6ｍ、深さ 1.4ｍを測る。南東から北西方向へ走向する。溝内の堆積状況は最下層に30cmの厚い黒灰色粘土層、その上部に木片等を含む粘土層が薄く堆積する。遺物は少なく、最下層より第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式の土器片が出土している。

再掘削の溝は前述溝の上部に掘られているもので、ほぼ、同規模で深さ 0.8ｍを測る。溝としては幅のわりに浅いものである。溝内の堆積は最下層に黒褐色粘土層（植物腐植土・第６図－18層）、その上部に淡黒灰色粘土層（17層）が約20cm堆積する。中層としては５～10cmの砂質土層と

粘土層の互層で形成されている。この中層内より多量の完形土器を含む土器群が検出された。完形土器は小形丸底壺・鉢が中心で、溝の西肩（ムラ内部側）より投棄された状況であった。上層は暗灰褐色粘質土層で、溝の埋土と考えられる。本溝の再掘削の時期は最下層からも布留式初頭の土器を検出しており、庄内式から布留式にかけての頃に掘削されたと考えられる。

ＳＤ－101

ＳＤ－101はトレンチ東端で検出した大溝である。溝幅約 3.2m、深さ１ｍを測り、南東から北西方向へ走向する。溝の断面形態は逆台形を呈す。溝の堆積は東肩下位に灰黒色粘土と粘砂が水平堆積しているのに対し、西肩付近は暗灰褐色粘土で切り込みがみられる。溝さらえをした可能性がある。これらを覆うように砂礫・細砂層が上部に堆積し、洪水堆積物が溝を埋没させたと思われる。遺物は土器小片２点のみである。下層より弥生中期の土器、砂層内より第Ｖ様式の土器を検出している。溝は弥生時代中期後半に掘削された可能性が高い。

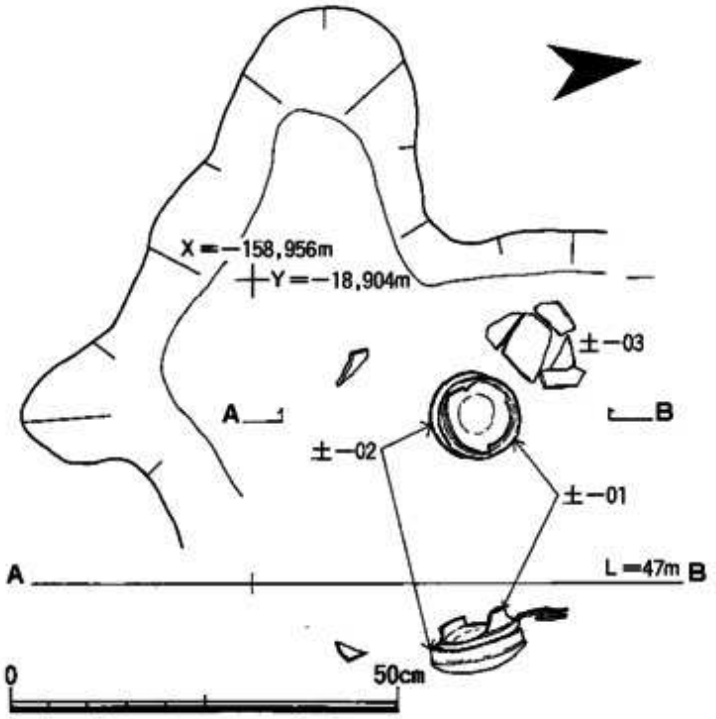
ＳＤ－102・ＳＤ－104

ＳＤ－102はトレンチ中央、ＳＤ－103の東約３ｍで検出した大溝である。溝幅約 4.3m、深さ１ｍを測り、南東から北西方向に走向する。溝は幅広の浅いもので、断面形態は逆台形を呈す。溝内の堆積土は粘砂・細砂・微砂層の10～70cmの厚さの土層が互層になって構成されている。掘削後、早い時期に埋没したものと思われる。溝の中位で自然木・加工木を多く含んでいた。これらと混在する状態で第Ｖ様式後半の土器も検出している。加工木等は流されてきたような状況で砂層内に埋没していた。

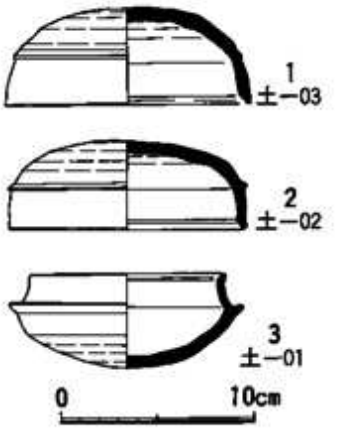
ＳＤ－104はＳＤ－102の東肩より検出した小溝である。北西方向から東西方向に向きを変え、ＳＤ－102に流れ込む小溝である。溝の規模は北西方向の時には 1.6ｍを測るが、ＳＤ－102に流れ込む東西溝になると幅 0.8ｍに小さくなる。深さ 0.8ｍを測る。溝内の堆積は黒灰色微砂層で形成されている。遺物は土器片が少量出土したのみである。溝の上面は河道Ⅱによって切られているため、杭等についてはどちらのものか判断できないものもあるが、ＳＤ－104の東側の肩部分に 0.5ｍおきに杭が打たれている。また、ＳＤ－104の北西から東西に主軸をかえるコーナ一部分にも杭が打たれており、堰状にしていた可能性がある。時期は第Ｖ様式で、ＳＤ－102とともに開口していたものと思われる。

ＳＫ－101

ＳＫ－101はトレンチ西端で検出したもので、弥生時代の土坑としては本調査で唯一のものである。径 0.7ｍ、深さ 0.9ｍを測るほぼ円形を呈する土坑で、断面形態は円筒状を呈す。土坑の堆積状況は単純で、三層に分層される。第１層：灰褐色砂質土層、第２層：暗灰色砂質土層、第３層：暗灰色粘質土層となる。遺物は土器小片のみでほとんど含んでいない。土坑の時期は第Ｖ様式の土器片が含まれていることから、第Ｖ様式頃の所産と思われる。土坑の性格はその形態から井戸の可能性が高い。



第7図　河道Ⅱ遺物出土状況図及び見とおし図（S＝1/10）



第8図　河道Ⅱ出土須恵器（S＝1/4）

(3). 古墳時代後期の遺構

河道Ⅱ

河道Ⅱはトレンチ東半で検出した河道である。東南東から西北西方向へ流れる浅い砂層堆積層で、河幅は一定しない。河幅１～３ｍ、深さは 0.4cm前後である。河道はベースを削りながら流れていたと思われ、河道内は凹凸が激しい。10～20cm程の小ピット状の穴や１ｍ程の穴が河道内に多く形成されている。砂層堆積は細砂・微砂層で構成され、土層は安定した堆積でない。遺物は砂層内に須恵器片や土師器片となって点在して出土したが、磨滅は少ない。また、河道の北端では完形の須恵器杯蓋と杯身が重なった状態で出土した(第7図)。河道内の土器にはほとんど時期差がなく、須恵器のⅡ型式に相当する。

河道Ⅰ

河道Ⅰは前記河道Ⅱの東側で検出した河道で、同じ方向に流れる。河道Ⅰは河道Ⅱに一部重なりながら流れる。河幅１～２ｍで一定せず、また、深さも局部的に65cm程の深い所もあるが、平均30cm程である。河道内は小ピット状の穴が多数あいている。本河道の堆積は暗褐色の砂礫層の単層で、土器を多量に含んでいた。土器は完形土器を数点含む大形破片で、須恵器と土師器がある。完形土器には台付長頸壺や広口壺、杯蓋などがある。本河道内の遺物は若干古いものも混在するが、須恵器のⅢ型式・Ⅳ型式に相当する。

3．出 土 遺 物

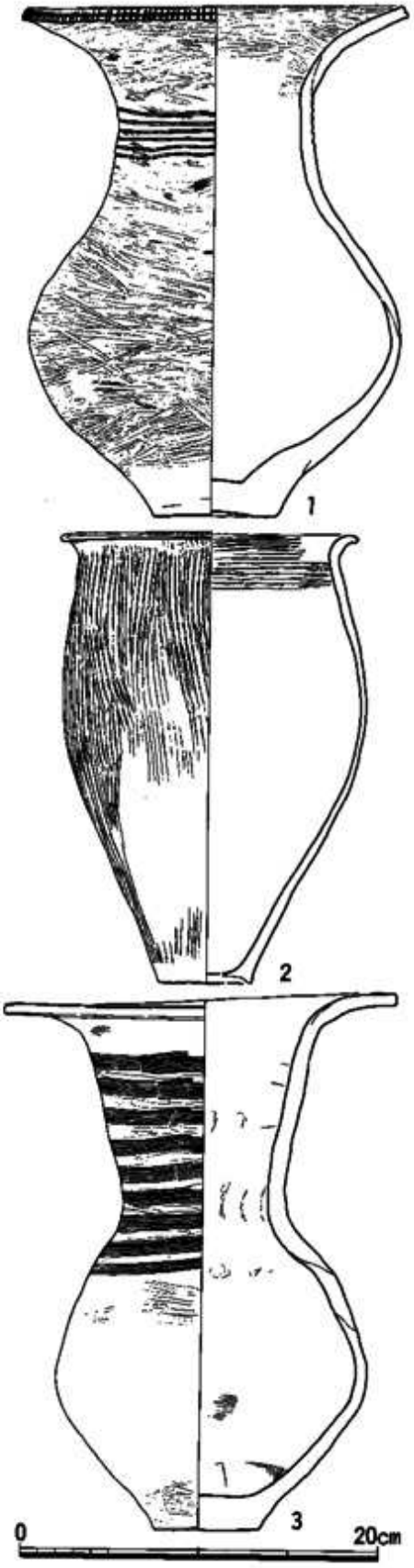
(1). 土器

第27次調査において出土した土器は、弥生時代前期から古墳時代後期まで含んでいるが、数量的には古墳時代の土器が多い。遺構的にはＳＤ－105、河道Ⅰ、河道Ⅱから完形品を含む良好な土器が出土している。他の遺構については溝の所属時代を示すと思われる資料を図示することにしたい。

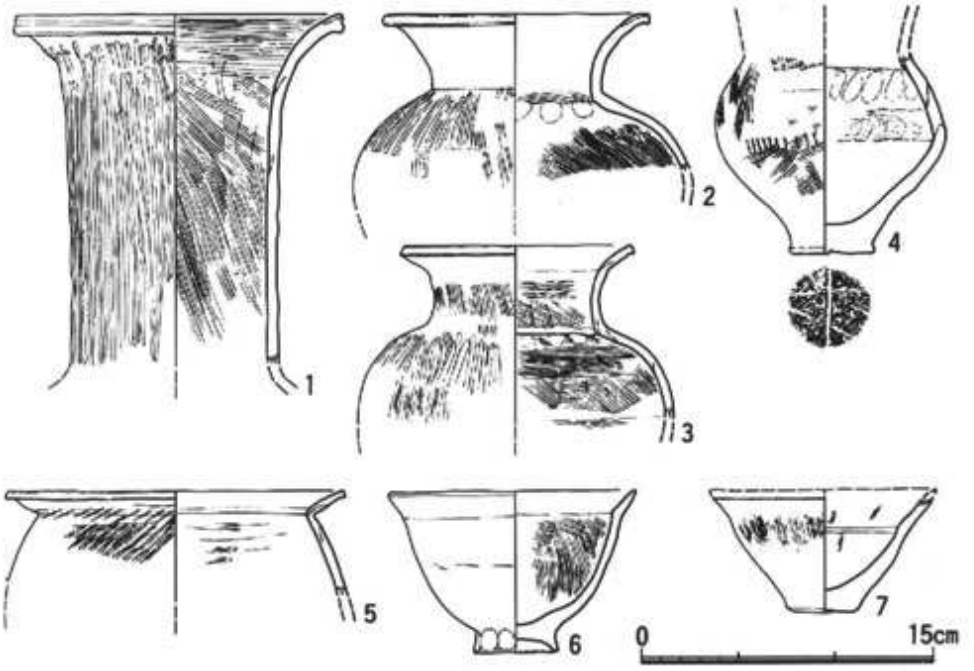
ＳＤ－201・ＳＤ－106出土土器（第９図）

ＳＤ－201からは完形土器が２点出土した。第９図－１は溝の上層（灰色粘砂層）より横転した状況で出土したもので、口縁部の一部を欠く。器高28.4㎝、胴径20.6㎝を計る。胴部が張り、長頸化した頸部も太く全体におしつぶされた感じのするものである。口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。端面は一条の沈線をめぐらした後、ヘラ状工具で刻目をつける。頸部には細いヘラ描沈線が六条施されている。器面は全体にナデ調整後、丁寧なミガキをおこなう。底部裏面は輪台状を呈し、植物繊維痕が残る。また、局部的ではあるが、ケズリがみられる。砂粒を多く含み、淡褐色を呈す。第９図－２は前述の土器より10㎝上で、黄灰色粘砂層からおしつぶされた状況で出土した。保存状態は極めて悪い。倒鐘形の体部にやや口縁部がしまる形態を呈す。口縁部はゆるやかに外反し、端面には刻目をもつ。外面及び口縁部内面には粗いハケが施され、内面は丁寧なナデ調整がおこなわれる。典型的な大和型甕である。体部下半は焼成の為、器面は荒れている。

第９図－３はＳＤ－106の東肩から東へ２ｍ地点の灰黒色粘土ベース直上で検出した。口縁部と胴部の一部を欠くがほぼ完形である。球形の胴部に長頸化した頸部がつく。口縁部は水平方向に強く外反する。端部は上方にわずかに肥厚する。頸部から胴部にかけて９帯の櫛描直線文がめぐるが、この直線文



第９図　ＳＤ-201・ＳＤ-106 出土土器
（Ｓ＝¼）



第10図　ＳＤ-102 出土土器（Ｓ＝¼）

は４回にわたる継ぎ描きである。直線文間にはミガキがみられる。胴部にも全面ミガキが施されていたと思われるが、磨耗の為、一部は不明である。本土器は頸部の器壁が厚く１cmを計る。

ＳＤ－102出土土器（第10図）

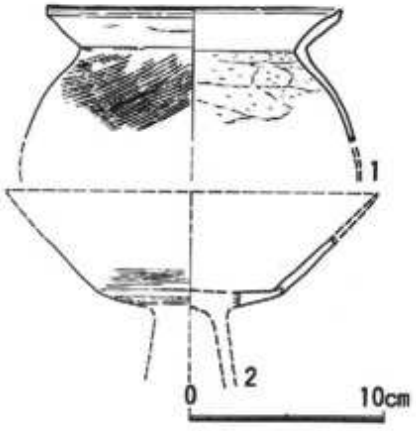
ＳＤ－１０２の下層（灰黒色砂質土層）から破片ではあるがまとまって土器が出土した。第10図－１は長頸壺の頸部である。円筒状の頸部に短く外反する口縁部がつく。口縁部はわずかに下方へ肥厚する。口縁端部は面をもち、強いヨコナデによって、中央部が凹む。口縁部内面及び頸部外面にはヘラミガキが施される。頸部内面には左上がりのハケがみられる。２・３は同形態の広口壺である。扁球形の胴部に大きく外反する頸部がつく。２の口縁部は下方へ肥厚し、面をもつ。口頸部は丁寧なヨコナデが施される。胴部上半にはハケ調整がみられるが、下半はナデをおこなっている。内面には左上がりのハケが施されている。３は胴部にミガキを施している。両者ともに外面には煤が付着している。４は小形の長頸壺の胴部である。鉢形の胴部下半を成形後、二帯の粘土紐で胴部上半を成形する。外面にはハケがみられるが、ナデによって消されている。胴部中央に最終のタタキをおこなっている。胴部中央の内面には局部的な粘土のかき取りがみられる。底部裏面には木葉痕を残すが、その上に一本の縦線がひかれ、記号文としている。５は甕の口縁部である。口縁端部は面をもっている。体部には右上がりのタタキが残る。６・７は鉢である。同形態であるが、６の底部は指先によって底部をつまみ出し、上げ底とする。６は外面にナデ調整を施す。７は細かいハケを施すが、ナデによって消される。

ＳＤ－105出土土器

ＳＤ－１０５の再掘削後の溝の中層内から完形土器を含む多量の土器を検出した。また、少量であるが下層からも土器を検出しており、わずかであるが時期差がみられる。

下層出土土器（第11図）

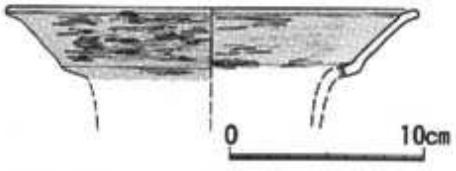
図化できるものは２点である。第11図－１は中形の甕である。生駒西麓産で、いわゆる河内型庄内甕とよばれるものである。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は面をもつが、わずかに凹線状の凹みをもつ。上端は鋭い。口縁部はヨコナデを施すが、外面には接合痕を残す。体部の外面には細い右上がりのタタキを施す。内面は右から左方向のケズリがみられる。また、口縁部との界は鋭く、稜線をもつ。第11図－２は高杯の杯部である。杯部は大きく外反するもので、杯部底面とは明瞭に屈曲する。精製土器で、内外面には丁寧なミガキがみられる。



第11図　ＳＤ-105 下層出土土器（Ｓ＝¼）

中層出土土器（第12図・第13図）

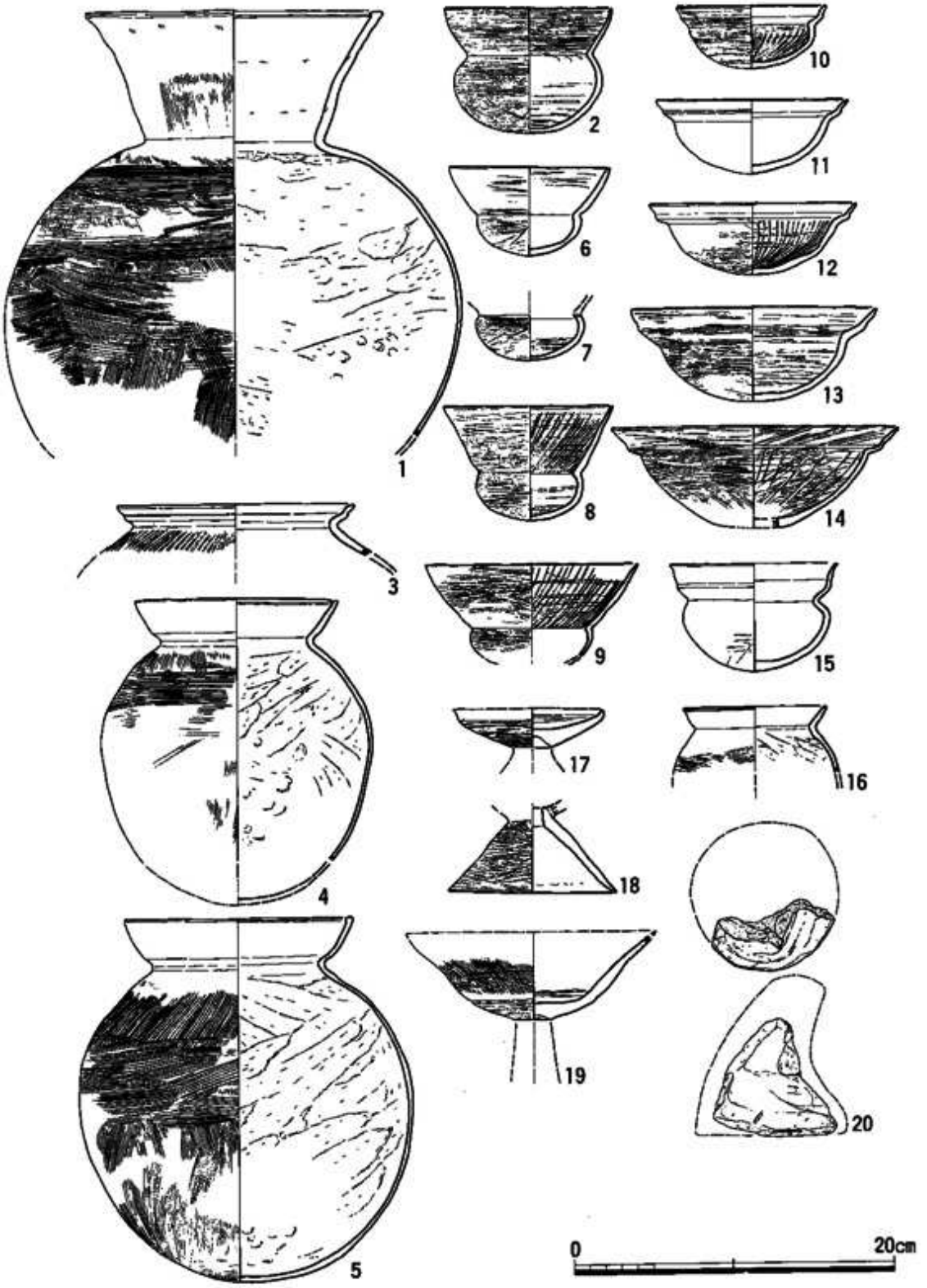
壺　第12図の土器は丹塗の二重口縁壺である。内外面に丹が厚く塗られている。頸部以下は欠失するが、口縁部から察するとやや太い頸部になるようである。口縁部は大きく外反する。口縁部は内側に肥厚し、甕の口縁部にちかい形態をもつ。ハケ後、丹を塗り、わずかにミガキを施す。第13図－１は大形の直口壺である。球形の体部にやや外反ぎみに直口する口頸部がつく。口縁端部は二重口縁壺のように内側に肥厚する。体部は縦位のハケを施した後、横位の不規則なハケがめぐる。このようなハケの調整は甕の体部の調整に似る。内面は体部下半が左上がり、上半が右上がりのケズリをおこなう。内面の上部ちかくではケズリを消すナデがみられる。ケズリは頸部まで及ばない。体部中位には指頭圧痕を残す。２は小形丸底壺である。扁球形の体部にやや内湾ぎみに立ち上がる口縁部がつく。内外面には細いミガキを施す。



第12図　ＳＤ-105 中層出土土器１（Ｓ＝¼）

甕　３はＳ字口縁の甕である。肩部の張る甕で、口縁部は短くＳ字状を呈す。体部の上半には貝殻による調整をおこなう。搬入土器である。４・５は球形の体部に内湾ぎみに立ち上がる口縁部を有し、端部は内側に肥厚する。体部は縦位のハケ後、体部上部に横位のハケがめぐる。内面は底部に指頭圧痕を残すが、上部には右上がりのケズリをおこなう。

鉢　鉢は大きく四形態がある。６～９は扁球形の小さな体部に発達した口縁部がつくものである。体部は浅く、内面にはケズリの残るものもある。口縁部はやや内湾ぎみになるものが多い。内外面は細い丁寧なミガキが施される。さらに口縁部の内面には放射状にミガキを施し、暗文と



第13図　ＳＤ-105 中層出土土器２（Ｓ＝¼）

する。精製土器である。10～14は扁平な浅い体部に段状の口縁部がつくものである。口縁部は短く段をもって外反する。大きさは約9～18cm程のものである。いずれも外面は横位の細いミガキを施し、部分的にケズリが残っている。内面も横位のミガキを施した後、体部に放射状のミガキをいれ、暗文とする。これらの土器も前者と同じ手法で、精製土器である。15は扁球形の体部に段状の口縁部がつくが、口縁部は上方へ立ち上がる。口縁端部はやや外反し、鋭く、体部にはミガキ調整が残る。山陰系の土器である。16は甕にちかい形態のもので、球形の体部に短く外反する口縁部がつく。体部の外面にはミガキが施されている。また、内面は左上がりのケズリがみられる。本土器は粗製の鉢である。

器台　17・18は器台である。17は杯部であるが、端部・脚部を欠失する。浅い杯部に短く上方に立ち上がる口縁部がつく。内外面にはミガキが施される。裾部とは接合部で剝離している。18は脚部である。直線的に広がるもので、裾端部は鋭い。杯部とは中空になっている。外面には横位のミガキを施している。両者とも精製土器である。

高杯　19は高杯杯部である。上外方へ広がる杯部である。杯底部は小さく、口縁部が発達する。杯底部と口縁部との界には一条の凹線がめぐる。口縁部の外面にはハケ調製、底面にはケズリがみられる。脚部とは接合部で剝落している。

支脚　20は土製支脚である。底部から立ち上がる部分の断片で、およそ三分の一を残す。手づくね成形で、全面はナデ調整で仕上げられている。火熱の痕跡はみられない。

河道Ⅰ出土土器

河道Ⅰの粗砂層内から完形土器を含む多量の須恵器・土師器類を検出した。出土遺物はその型式差から時期幅があるが、ここでは器種ごとに説明する。

須恵器（第14図・第15図）

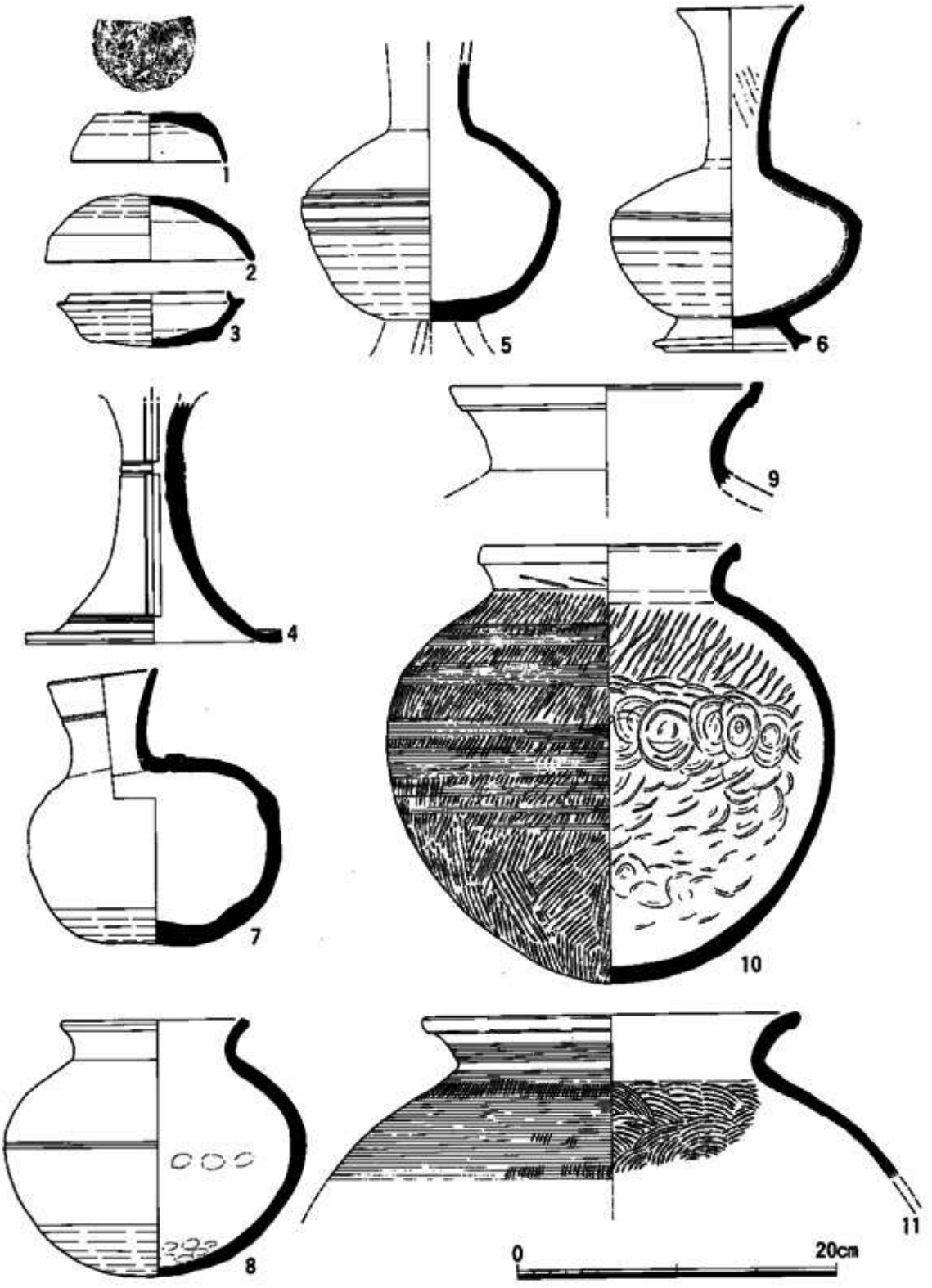
杯蓋・杯身　第14図－1・2は杯蓋である。1は小形品で、杯身と区別できないものである。天井部には×印の記号が刻まれている。2は口縁部と天井部との界が不明瞭なもので、口縁端部は丸くおさめる。3は杯身である。小形品で受部は小さく外方へ突出する。口縁部は短く立ち上がる。端部は鋭い。

高杯　4は高杯脚部である。長脚で二段の長方形の透かしを二方にもつ。脚部中央と裾部には二条の凹線がめぐる。

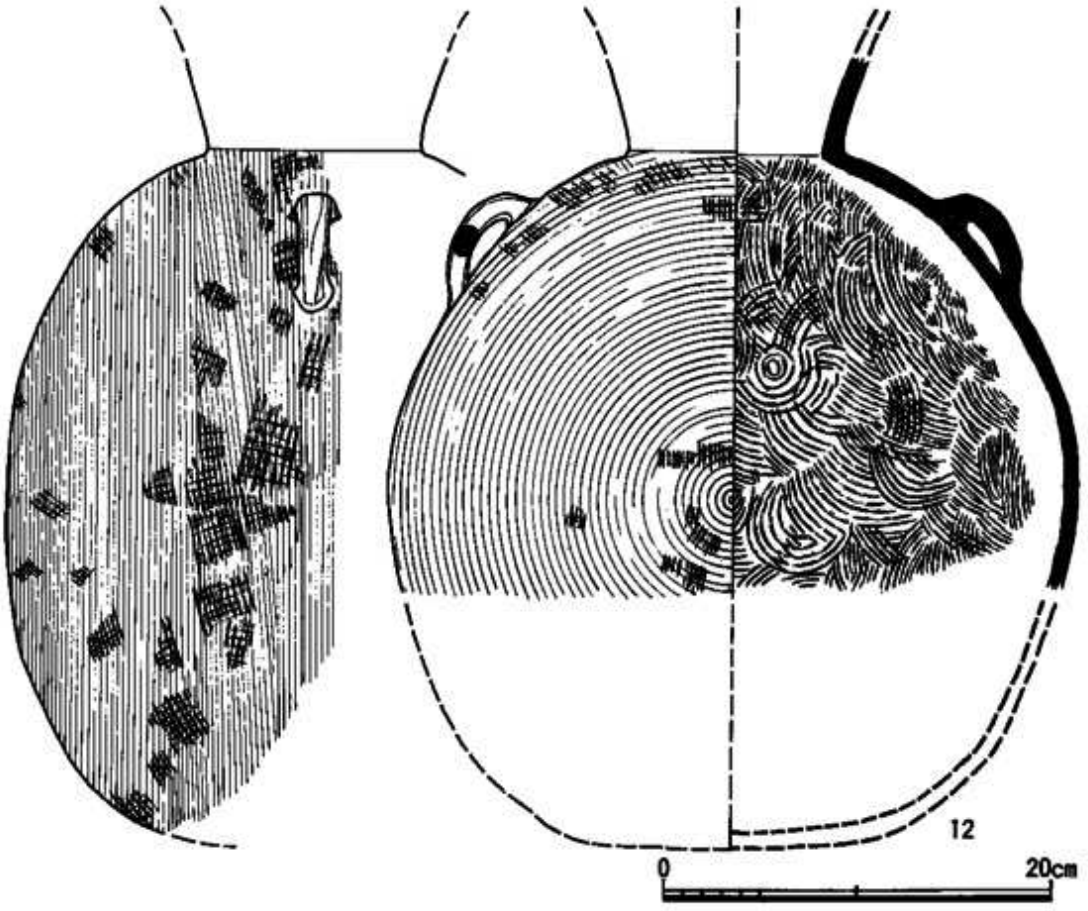
壺・平瓶　5・6は脚台付の長頸壺である。5は大きな脚台がつくと思われる。6はハの字状の脚台がつく。いずれも体部中央に凹線をめぐらす。7は平瓶で、体部天井に円形粘土をつける。

甕　9・10は中形甕である。10はほぼ完形である。11は大形甕である。いずれも体部には平行にタタキを施した後、カキ目をつける。

提瓶　第15図は大形の提瓶である。体部の上部には環状の把手を二つ付ける。体部はタタキを施した後、カキ目が同心円状にめぐる。



第14図　河道Ⅰ出土須恵器1（S＝¼）

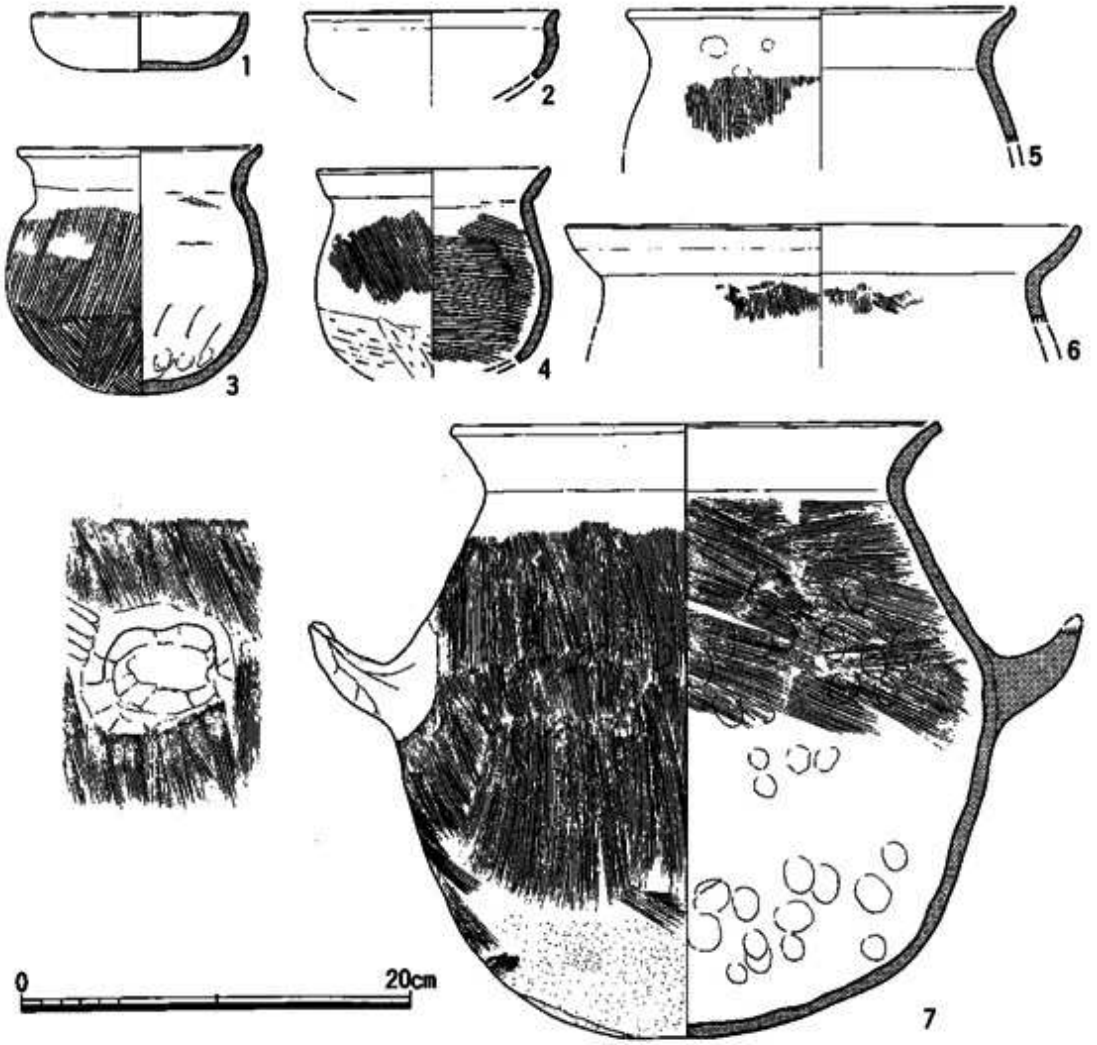


第15図　河道Ⅰ出土須恵器２（S＝¼）

第３表　河道Ⅰ出土須恵器観察表

番号	器種	法量	調整	色調	備考
1	杯蓋	口径9.5cm　器高3.0cm	口縁部ヨコナデ　天井部ヘラ切離し無調整	淡青灰色	天井部に×のヘラ記号あり
2	杯蓋	口径12.8cm　器高4.1cm	口縁部ヨコナデ　天井部回転ヘラケズリ	淡青灰色	
3	杯	口径10.0cm　器高3.3cm	口縁部ヨコナデ　天井部ヘラ切離し無調整	淡青灰色	
4	高杯	脚裾部径15.9cm	裾部ヨコナデ　脚柱状部外面はヨコナデ、内面はしぼり痕をのこす	淡青灰色	柱状部、裾部に二条１単位の沈線
5	長頸壺	胴部最大径16.3cm	体部上半、頸部ヨコナデ 体部下半回転ヘラケズリ	淡灰色	胴部に二条１単位の沈線を２組施す
6	長頸壺	口径7.8cm　胴部最大径15.6cm 脚台径8.1cm	口頸部・体部上半ヨコナデ 体部下半回転ヘラケズリ、脚台ヨコナデ	青灰色	胴部に二条の沈線を施す
7	平瓶	口径6.5cm　胴部最大径13.7cm	口頸部ヨコナデ　体部上半ヨコナデ 体部下半回転ヘラケズリ	淡灰色	頸部に一条の沈線を施す
8	短頸壺	口径11.0cm　胴部最大径18.8cm	口縁部・体部上半ヨコナデ 体部下半回転ヘラケズリ	青灰色	胴部に一条の沈線を施す
9	甕	口径19.5cm	口縁部ヨコナデ	淡青灰色	
10	甕	口径16.0cm　胴部最大径28.0cm	口縁部ヨコナデ　体部上半平行条線タタキのちカキメ、体部下半平行条線タタキ	淡黒灰色	体部内面は当て具痕がのこる
11	甕	口径23.3cm	口縁部外面はカキメののちヨコナデ　内面ヨコナデ　体部上半平行条線タタキののちカキメ	淡灰色	体部内面は当て具痕がのこる
12	提瓶	胴部長径35.5cm 胴部短径31.0cm	口縁部ヨコナデ 体部平行条線タタキののちカキメ	淡灰色	肩部に１対の把手 体部内面は当て具痕がのこる

※ ロクロの回転方向はすべて時計回り



第16図　河道Ⅰ出土土師器（S＝¼）

土師器（第16図）

杯　第16図－1は浅い杯で、口縁部を丸くおさめる。全体に磨滅をうける。2はやや深くなる杯で、口縁部は短く外反する。内外面ともにナデ調整をおこなう。

甕　第16図－3～7は甕である。3・4は小形の甕で、3はほぼ完形である。球形の体部にゆるやかに外反する口縁部がつく。端部は上方へ小さくのびる。4は底部にケズリがみられる甕である。5～7は大形の甕である。5・7は同形態と思われ、口縁部は3と同様、上方へわずかに突出する。外面に細かいハケ調整がみられる。7は体部中央に把手がつく。底部外面は磨耗のためか、ハケ調整がみられない。内面は接合部付近に指頭圧痕を残す。特に底部付近は多い。6は長胴の甕になると思われる。口縁部はゆるやかに内湾ぎみに立ち上がる。端部はわずかに面をもつ。外面にはハケ調整がみられる。

(2). 石器・木製品

第27次調査において、石器は他の調査地点と比べものにならない程少ない。磨製石器１点、サヌカイト10点、流紋岩片４点である。写真１は柱状片刃石斧で、刃部と基部を失う。幅 3.7cm、厚さ 3.5cm、現長 7.0cmを計る。刃部は衝撃の為、階段状に剝離し、基部は一度の圧力で折れている。石材は未鑑定である。ＳＤ－103灰白色粗砂層から出土した。サヌカイトは削器が３点、剝片（二次加工のあるものも含む）が７点である。ＳＤ－102から剝片１点が出土しているが、他は遺構上面の包含層や中世等の諸遺構から出土している。河道Ⅰから出土した剝片はエッジが全て磨耗している。流紋岩は石包丁や砥石として使われるが、４点とも剝片である。ＳＤ－105から出土したものは石包丁の素材になるかもしれない。他の３点は河道Ⅰと河道Ⅱで出土している。

写真１　ＳＤ-103 出土
柱状片刃石斧

木製品はほとんどなく、ＳＤ－104から出土した杭やＳＤ－102から出土したツチノコ等で製品はほとんどない。

４．ま　と　め

(1). 遺構

第27次調査は唐古・鍵ムラの東端にあたる地区で、本遺跡の範囲確認調査としては十分な成果をあげることができた。発掘では弥生時代前期から古墳時代前期の大溝群、さらには古墳時代後期の河道２条を検出した。弥生時代の大溝はその走向方向から唐古・鍵ムラの環濠と考えられるものである。本調査地は東西に約80ｍ設定したため、微高地や微凹地部分が土層断面図より確認できた。これによると、トレンチ西端は微凹地、トレンチ西半が微高地、トレンチ中央が微凹地、トレンチ東端が微高地となる。この微地形の高低差は環濠の立地にも関係あるようである。環濠はトレンチ西半の微高地に掘削されているのである。今回の調査では６条の大溝を検出したが、時期的には２～３条の溝が開口していたと考えられる。これと第24次調査で検出している環濠の条数をたすと一時期３～４条の環濠によってムラが囲まれていたことがわかる。そして、環濠は微高地の縁辺部につくられ、内側の環濠から外側の環濠までは約150m程の幅をもつ。これは「環濠帯」と呼ぶべき区域になる。唐古・鍵ムラの本体は径 400mほどの区域にあり、それを囲む150～200ｍの帯状の環濠群が設定される。この環濠帯の区域内には土坑等の諸遺構はほとんどない。これは居住区との区別が明確にあったためであろう。このように考えてみると、本遺跡で検出されていない墓地群（方形周溝墓）や水田は環濠帯の外側に設定されている可能性がある。今回の調査において検出した弥生時代後期のＳＤ－102とＳＤ－104の関係は水田からの水を環濠に流

し込むようにしていたと考えられる。ＳＤ－104の小溝には杭列が並び、排水用に掘削されたものであろう。今後、さらに外側の調査が重要になっていくと思われる。

古墳時代前期に再掘削されたＳＤ－105は唐古・鍵弥生ムラのその後を考える上で重要な遺構である。古墳時代前期の遺構は、遺跡の西半に限れば第１・５・23・24・26次調査とほとんどの地区で土坑等を検出している。今回の地点はこれらの一番外側にあたる溝になり、古墳時代前期においても本地がムラの東端であったことを示している。本溝が環濠になるのかどうか、今後、周辺との遺構の関係でとらえていく必要がある。第13次調査においてはムラの西端を示す溝が検出されており、本溝との関連が注目される。

次に古墳時代後期の河道であるが、この河道は今回の調査においては予想もしなかった成果であった。河道内に完形土器を含む多量の土器が検出された。土器は若干の磨耗がみられることから、本遺跡周辺の遺物を流してきたものと思われる。唐古・鍵遺跡周辺では法貴寺・舞ノ庄遺跡が考えられ、条里の乱れからも上流地域にあたる。今後、上流地域の確認が必要であろう。

(2). 遺物

第27次調査で出土した遺物は土器、石器、木製品、自然遺物等になるが、ムラから離れているため、全体的な総数は少ない。特に、石器や木製品は非常に少ない。遺物量の少なさはムラはずれの様相を物語っている。これらの中で、注目されるものとしては、弥生土器と土師器がある。弥生土器ではＳＤ－201から出土した広口長頸壺（第９図－１）がある。従来の編年によれば第一様式の新段階のものであるが、体部の張りが球形化し、口縁部にヘラ描の列点と沈線をめぐらす要素は新相である。共伴資料がないことは残念であるが、櫛描文が伴う時期に相等するものであろう。唐古・鍵遺跡出土資料からいうと第22次調査ＳＫ－201出土土器群の時期にあたるものである。したがって、この時期に溝が掘削されることになるであろう。これは唐古・鍵遺跡の弥生前期の環濠になると思われるものが、いずれもこの時期になることは注目される。

土師器については、ＳＤ－105よりまとまった資料を得た。下層資料が庄内期、中層・上層資料が布留期にあたるものである。小形の精製土器が量的に多いことも注目される。なんらかの祭祀的行為もうかがわせるが、土器以外の共伴資料がなく、その内容は把握できない。編年的には唐古・鍵遺跡第13次調査ＳＤ－ 05 出土土器群の次期にくる資料となる。

以上、簡単に遺構・遺物についてまとめてきたが、今後、整理作業の進展に伴い新しい知見が広がると思われるが、正式報告に譲ることにする。

Ⅲ．第28次調査の概要

1．調査の全容

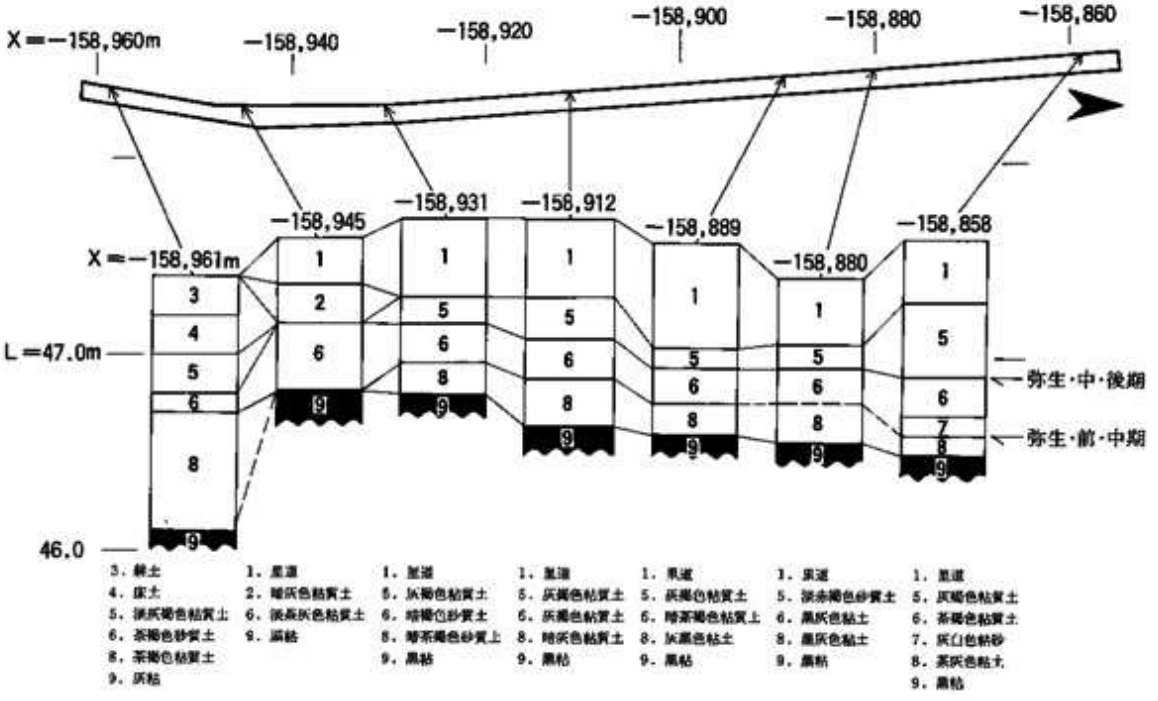
本調査地は第27次調査の西側隣接地にあたり、唐古池から東へ 100ｍの地点で遺跡の北東部に位置する。第27次調査の経過からムラを囲む環濠の延長にあたると推測された。

調査は用水路改良工事のため、工事掘削部分の約 2.5ｍ、長さ 110ｍの南北に細長いトレンチとなった。また、現水路で廃土処理困難な状況であったため、遺構の確認と土層の堆積状況の把握に努めた。その結果、弥生時代の大溝６条、近世井戸２基を検出した。トレンチ南端で検出したＳＤ－101と、トレンチ北端で検出したSD－105，SD－106についてはほぼ完掘することができたが、他の溝については上面での確認に留まった。しかし、第27次調査と本調査との溝が明らかにされ、ムラを囲む環濠の方向性をおさえることができた。不本意な調査であったが、唐古・鍵ムラの範囲を確実にしたことは重要な成果となった。

2．遺構

(1). 堆積土層

本調査における堆積土層は現水路になっていたため、また、断面図の部分が里道と重なっていることもあり、他の調査地点とは土層上部においてかなり異なる。第１層は里道部分にあたる土

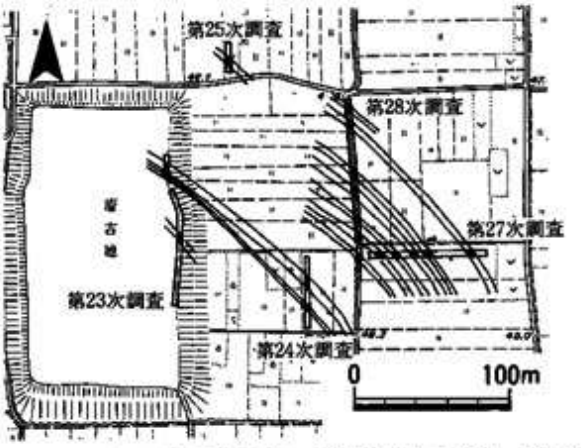


第17図　第28次調査基本土層関連図（Ｓ＝1/40）

層で茶褐色土層である。この層は調査位置との関係上、トレンチの南端を除く全てに広がっている。トレンチ南端では水田面があり、第３層：水田耕層、第４層：水田床土層となる。第５層は灰褐色粘質土等で弥生・古墳時代の遺構面を覆っている。第６層は暗茶褐色粘質土等でトレンチ全面に広がっている。この土層上面が弥生時代中・後期の遺構面になると思われる。第８層は暗灰色粘質土や暗茶褐色粘質土等で一定ではないが、弥生時代前・中期の遺構面と考えられる。第９層は黒色粘土層で粘土は硬い。弥生時代以前の堆積と思われる。第17図に示した基本土層関連図から、第９層はトレンチ南半部分（X＝ －158，910m～ －158，940ｍ付近）で高くなっていることがわかる。この弥生以前の微高地状の高まりは弥生時代を通じてみられ、遺構面の高低差として現れている。この土層観察からトレンチ南端と北半が微凹地で、トレンチ中央よりやや南側が高まりとして存在していたことがうかがえる。

(2). 遺構

第28次調査で検出した遺構は弥生時代の大溝７条と近世の井戸２基である。弥生時代の大溝については第27次調査で検出した大溝の延長と思われるものである。トレンチの全面において検出した。トレンチの南端で検出した溝をＳＤ－101とし、北へ順次遺構番号をつけた。



第18図　唐古・鍵遺跡北西部の遺構関連図（Ｓ＝1/600）

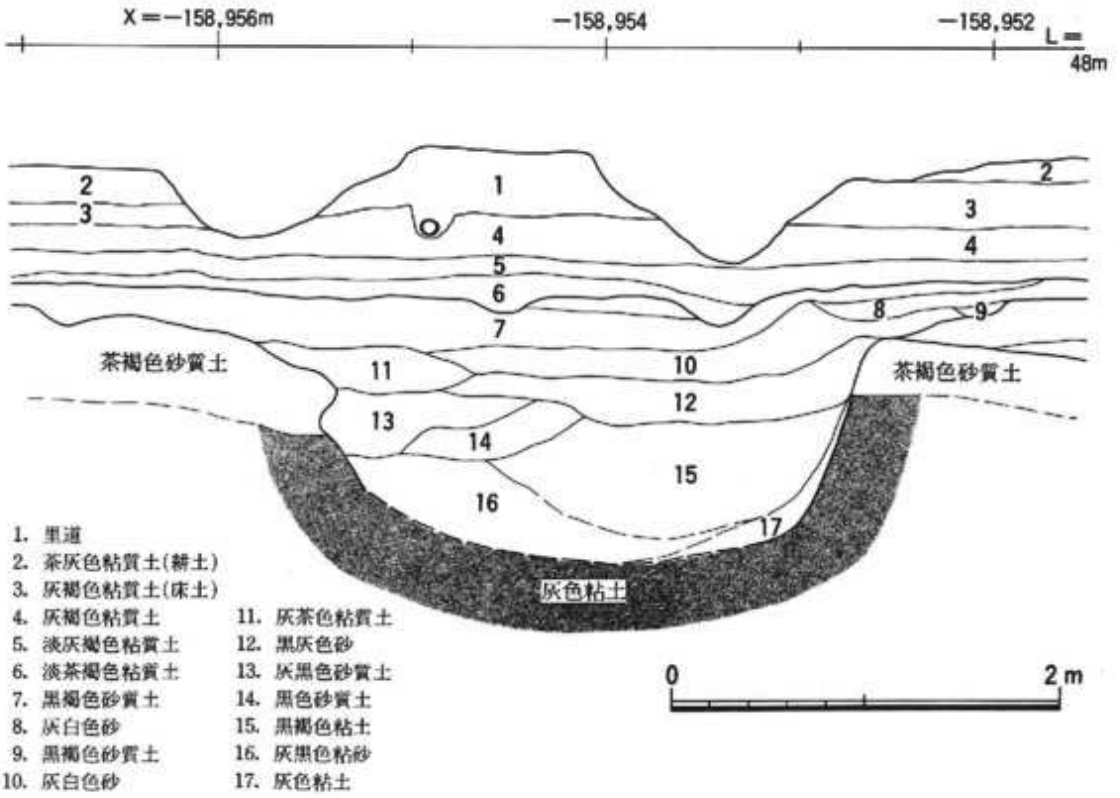
ＳＤ－101はトレンチ南端で検出した大溝で、溝幅約３ｍ、深さ 1.3ｍを測る比較的深い溝である。南東から北西方向に走向する。溝内の堆積に大きく二分される。下層は黒褐色粘土で植物腐植土層である。上層は10～20cmの砂質土層や砂層で構成される。遺物は上層から多量の土器を検出した。土器には半完形・完形の土器が多い。時期は纒向１式が多いが、若干の庄内式の土器も含んでいる。これら両型式の土器は層位的に分別できなかった。本溝の埋没が古墳時代前期にあったことはまちがいない。

ＳＤ－102は第27次調査ＳＤ－106に対応し、ＳＤ－106の上部砂層堆積を本溝の上面でも検出している。ＳＤ－103は第27次調査ＳＤ－105に対応し、溝の上部は暗褐色砂質土で埋没している。ＳＤ－104は第27次調査ＳＤ－103に対応し、溝の上部は暗灰色砂質土・暗灰黒色粘土で埋没している。ＳＤ－105は第27次調査ＳＤ－102に対応し、溝の上部は暗灰色粘砂や灰色砂質土等で構成されている。以上のＳＤ－102～ＳＤ－105までは上部のみの確認で完掘していない。

ＳＤ－106・ＳＤ－107はトレンチの北端で検出した溝で、南東から北西方向へ走向し、両溝は約3ｍ離れている。両溝とも粗砂層によって埋没しており、同時埋没の可能性が高い。ＳＤ－106は第27次調査ＳＤ－101に対応すると思われる。

第4表　第28次調査検出溝一覧表

溝番号	規模(m) 幅	規模(m) 深度	溝底標高	走行方向	弥生 Ⅰ	弥生 Ⅱ	弥生 Ⅲ	弥生 Ⅳ	弥生 Ⅴ	古墳 前	古墳 後	主要遺物	備考
SD-101	約3.0	1.3	45.4	南東一北西						↔		完形土器群	
SD-102	約4.5	—	—	〃	---			---					第27次SD-106に対応
SD-103	約2.5	—	—	〃			----			--			第27次SD-105に対応
SD-104	約4.5	—	—	〃			-----						第27次SD-103に対応
SD-105	約5.5	—	—	〃					--				第27次SD-102に対応
SD-106	3.2	0.8	46.2	〃				----					第27次SD-101に対応
SD-107	2.1	0.6	46.3	〃					---				



第19図　SD-101 西壁土層断面図（S＝1/40）

3．出土遺物

第28次調査において出土した遺物は量的に少なく、大半がＳＤ－101から出土した土器である。他の遺構出土の遺物は少なく図化できるものはないので、ここではＳＤ－101出土の土器について説明することにする。

ＳＤ－101出土土器（第20･21図）

ＳＤ－101の上層から完形土器を含む多量の土器が出土した。第20・21図はその一部である。

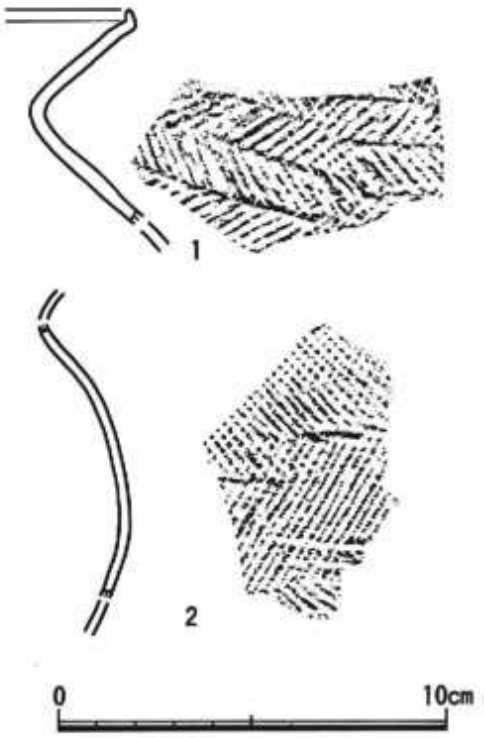
壺　壺には広口壺（第21図－１・２）、直口壺（同－３～５）、長頸壺（同－６）などがある。広口壺は口頸部が強く外反するものである。１は横長の球形の体部にハケを施した後丁寧なナデをおこなう。２は体部下半の鉢部を成形した後、上半を三、四帯の粘土帯で成形する。そのため、下半にはタタキ成形痕が、上半にはハケ調整痕が残る。直口壺には口頸部が直線的に外反するものもある。３は体部の上端にヘラによる鋸歯文をめぐらす。体部上半と頸部内面にはミガキがみられる。４は体部上端に竹管による記号文が押捺されている。記号文は横に三つ竹管文が並ぶ。体部は全体にハケ調整がみられる。５は大形の直口壺で生駒西麓産の土器である。内外面にミガキがみられる。６は長頸壺であるが、頸部は短くなり、体部の張りは横長になる。２と４の壺の外面には煤の付着がみられる。

甕　７～10は小形の甕である。いずれも球形にちかい体部に大きく外反した口縁部がつく。口縁端部は不明瞭ながら面をもつ。底部はわずかに突出するが、丸底の傾向がみられる。体部は鉢部までの成形が明瞭に残る。体部下半（鉢部）は右上がりのタタキ成形、上半も右上がりのタタキが多いが、８のように部分的に左上がりのタタキもみられる。10は鉢部との接合に縦位のタタキを施す。第20図には矢羽状のタタキを施す小片がある。

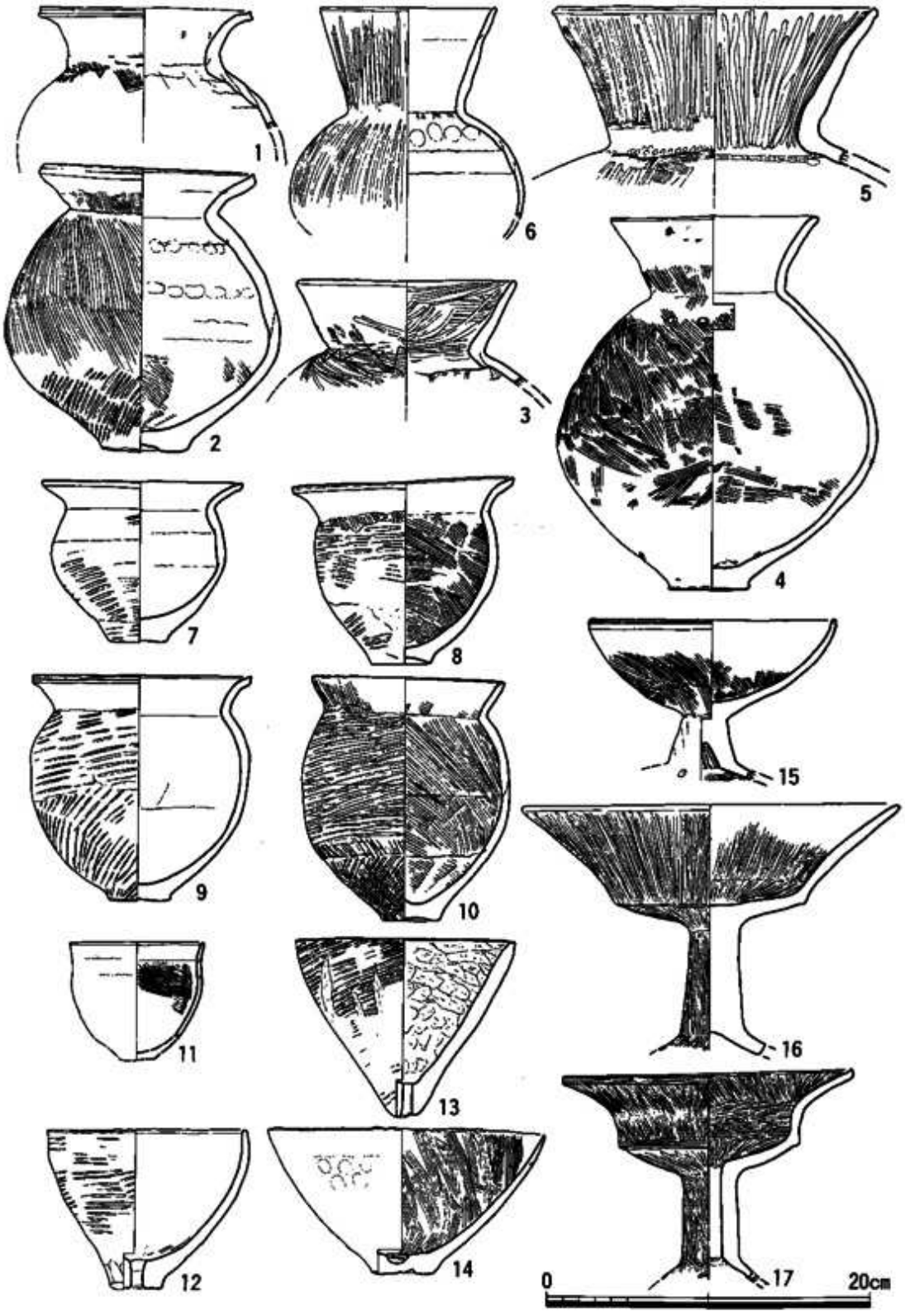
鉢・有孔鉢　11は口縁部を外反させる小形の鉢である。12･13は有孔鉢であるが、12は椀形の体部に底部がつき、13は尖底の鉢となる。13は内外面にケズリがみられる。14は口縁部の調整のない鉢であるが、底部の有孔を粘土で埋めている。

高杯　浅い椀形(15)と大きく外反する杯部(16)の二種がある。15は口縁端部に一条の凹線をめぐらす。16は内外面に丁寧なミガキがみられる。

結合形土器　17は広口壺の口縁部と高杯脚部を結合させたものである。杯部は強く外反する。内外面には細い丁寧なミガキが施されている。



第20図　ＳＤ-101 出土土器拓影（Ｓ＝½）



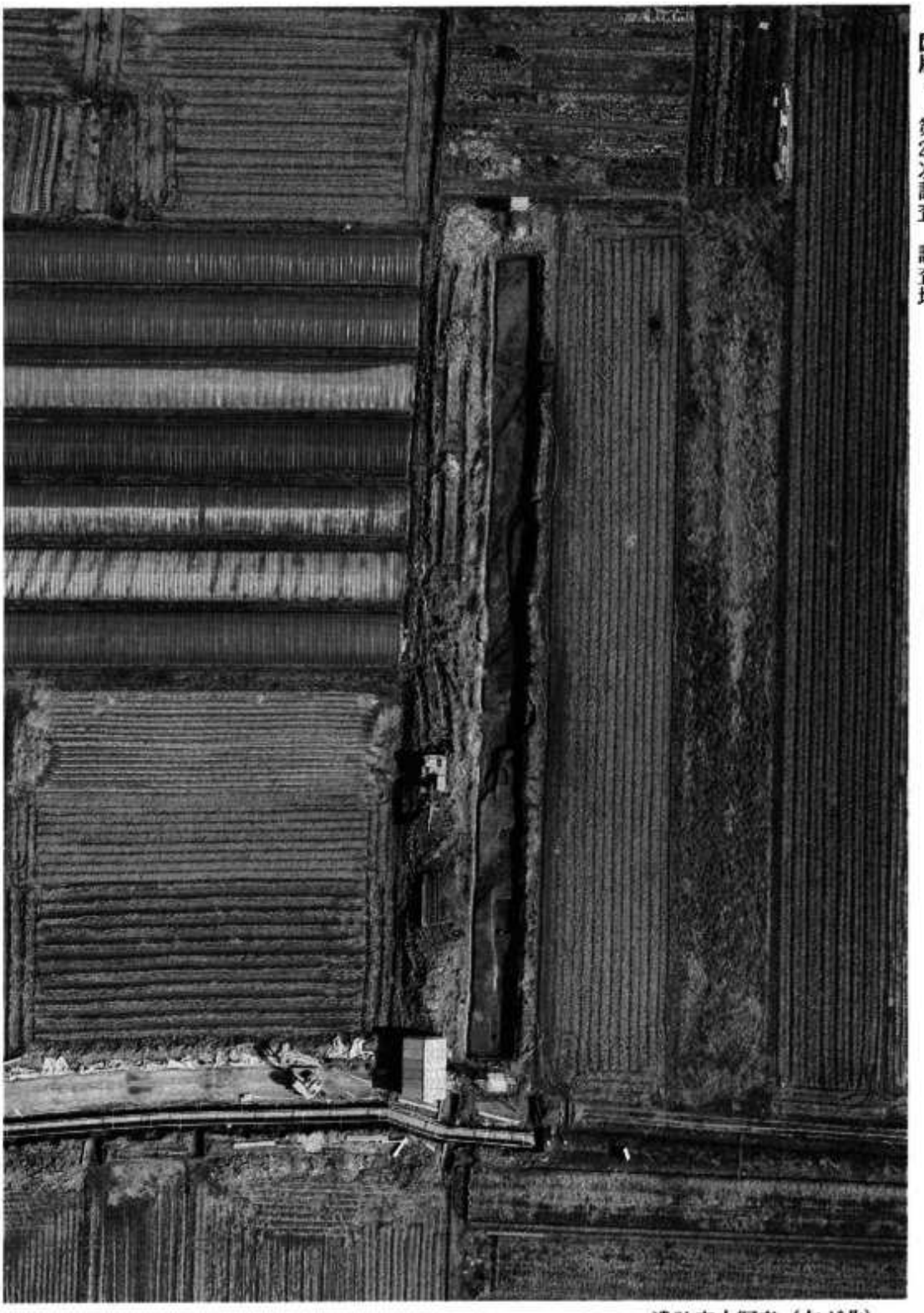
第21図　ＳＤ-101 出土土器（Ｓ＝¼）

4．まとめ

第28次調査は唐古・鍵遺跡の東端にあたり、南北に総延長110mに及ぶトレンチ調査であった。用水路改良に伴う調査の為、万全の調査とはいえなかったが、第27次調査の成果と総合すれば、ほぼ、本来の調査目的を達成することができた。調査では7条の大溝を検出した。これらは溝の走向方向から唐古・鍵ムラの環濠になると思われる。本調査では時期的に把握できるものはＳＤ－101のみで他の溝は第27次調査に所属時期を委ねなければならないが、この成果を考慮して溝の所属時期を考えると次のようになる。ＳＤ－102は第Ⅰ様式から第Ⅱ様式にかけて開口するが、その後、埋没する。第Ⅲ様式にはＳＤ－103とＳＤ－104が掘削され、第Ⅳ様式頃まで開口する。第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけてはＳＤ－102が再掘削、ＳＤ－105・106・107が開口する。さらに第Ⅴ様式末から布留期にかけてＳＤ－101、ＳＤ－105が掘削・再掘削される。このようにみると、一時期における溝の開口は2条ほどで、第Ⅴ様式頃では4条開口していた可能性がある。これらと第24次調査で検出している環濠を総合するならば、唐古・鍵ムラの北東部は一時期3条～4条で、第Ⅴ様式は6条～7条ほどの溝でムラが固められていたことになる。このような環濠の時期的変遷は、ムラの北西部の調査（第12・13・15・17・18・19・21次調査）でも同様な傾向がみられることから、唐古・鍵ムラの北半は約150m程の「環濠帯」と呼ぶべき地域が設定できる。これらは微高地上に立地するムラに対し、その微高地縁辺に形成されている。この環濠帯の区域においては土坑等の諸遺構も少なく、溝のみで形成される。したがって、この環濠帯の外部区域に水田もしくは墓地等の遺構も考えられるが、今後の調査を待たなければならない。以上、遺跡・遺構についてまとめた。

遺物においては土器が主であるが、SD－101から弥生時代終末の資料を得た。本溝の土器は纒向1式に相当する良好な資料である。若干の庄内式の土器を含む点については、混在資料なのか一括資料としてとりあつかっていいものか、今後の資料の増加をまちたい。

唐古・鍵遺跡
図　版



遺跡空中写真（左が北）

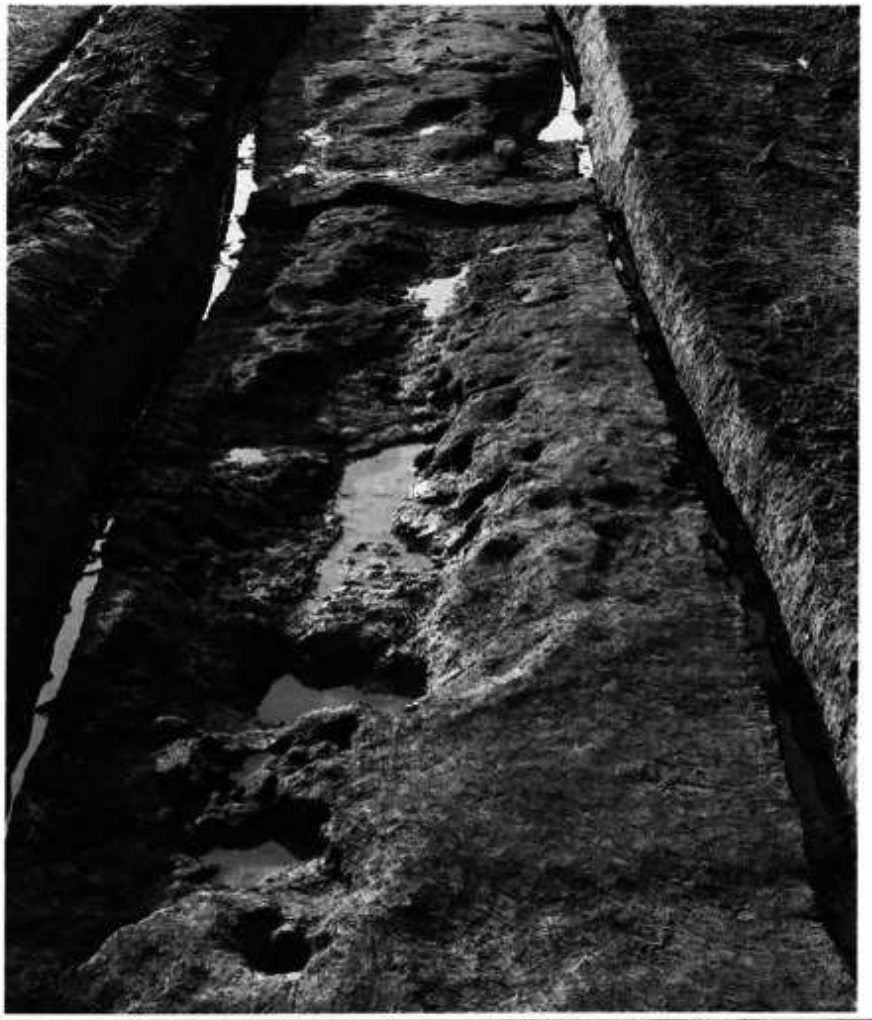
図版2　第27次調査　遺構

a. 遺跡空中写真遠景（東から）

b. 調査地全景（西から）

a. 河道Ⅱ　完掘状況（西から）

b. 河道Ⅱ　須恵器検出状況



a. 河道Ⅰ　完掘状況
（東から）

b. 河道Ⅰ　遺物出土状況

a. 河道Ⅰ
遺物出土状況

b. 河道Ⅰ　遺物出土状況

a. SD－105 古墳時代前期溝完掘状況（北から）

b. SD－105 古墳時代前期溝遺物出土状況

a. SD−104 完掘状況（西から）

b. SD−102 完掘状況（北から）

a．SD－101 掘り下げ状況（北から）

b．SD－103 完掘状況（北から）

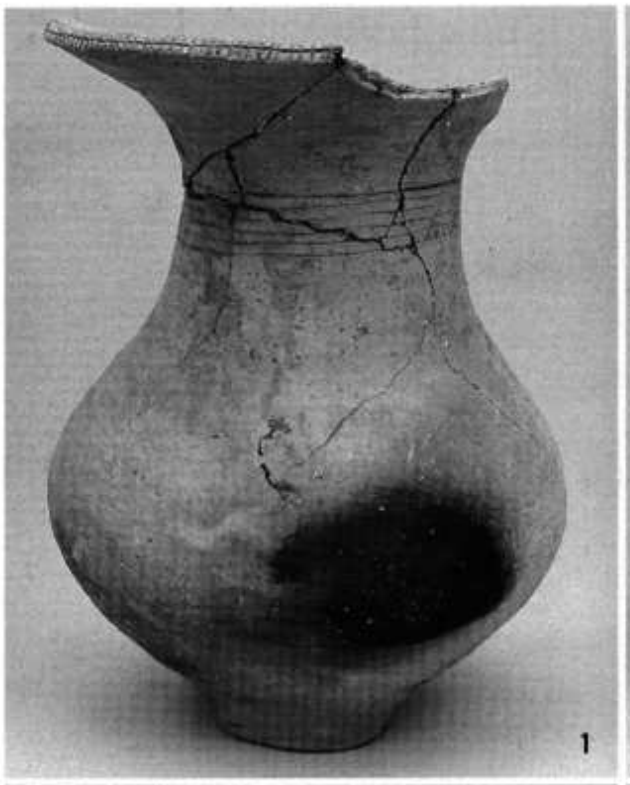
a. SD−106 砂層堆積状況

b. SK−01・02 完掘状況（南から）

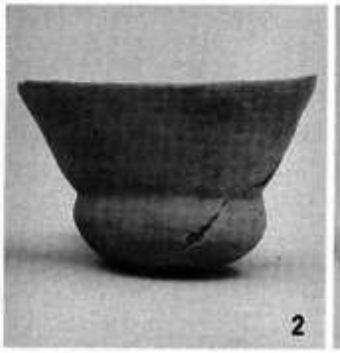
a. SD−106 広口長頸壺出土状況

b. SD−201 壺出土状況

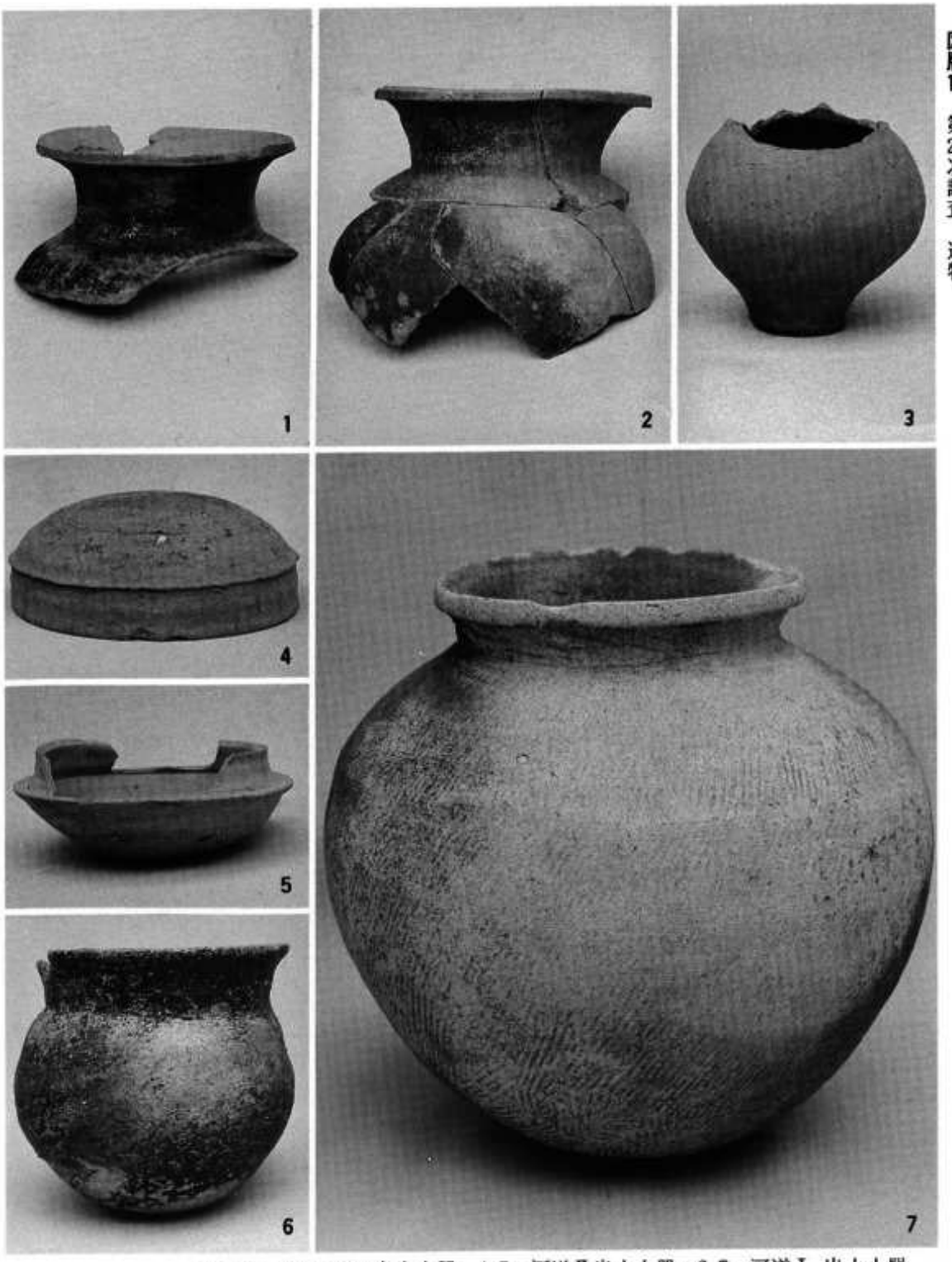
c. SD−201 甕出土状況



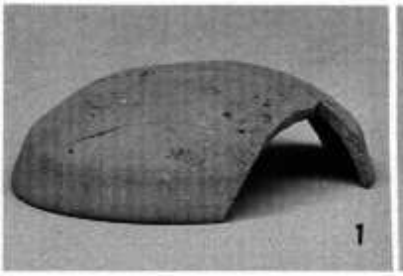
1·2—SD—201 出土土器
3—SD—106 西肩出土土器，4—SD—102 出土土器

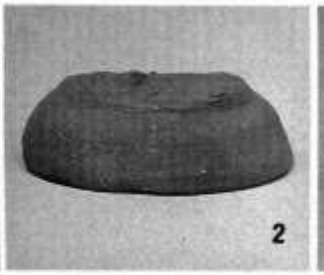


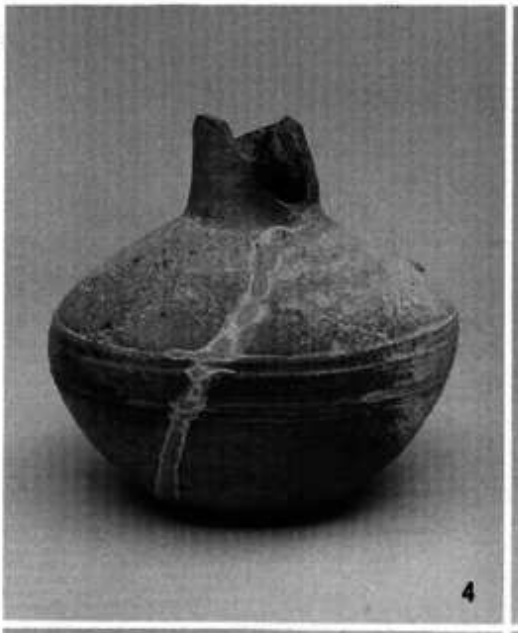
1～7－SD－105 出土土器

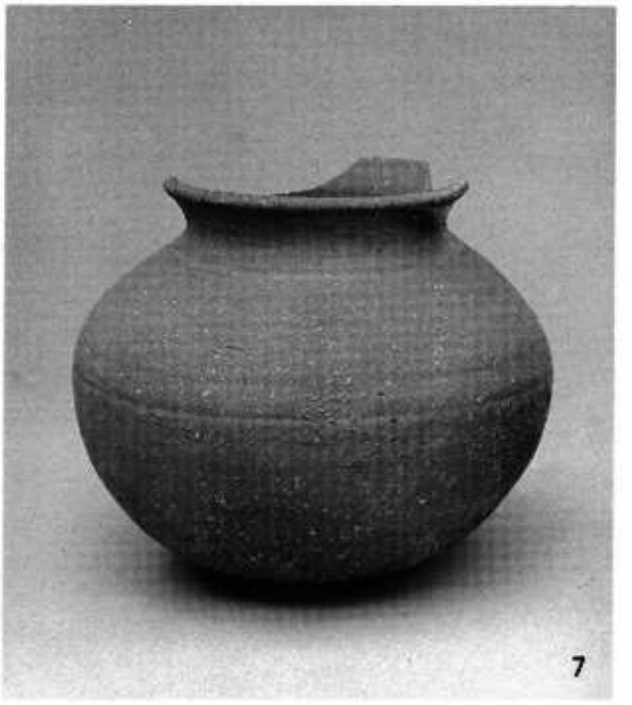


1～3－SD－102 出土土器，4·5－河道Ⅱ出土土器，6·7－河道Ⅰ 出土土器









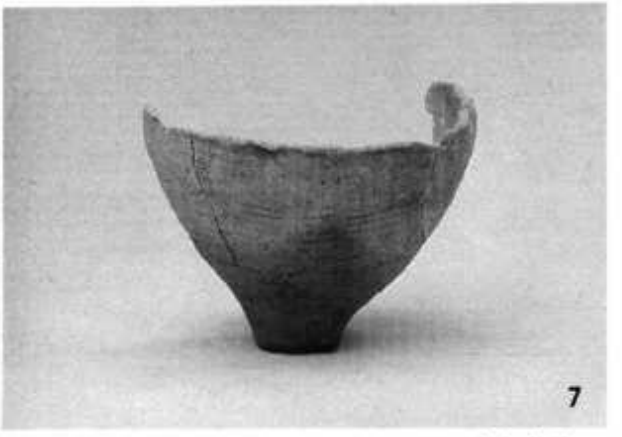
1～7一河道Ⅰ 出土土器

a. トレンチ全景（北から）

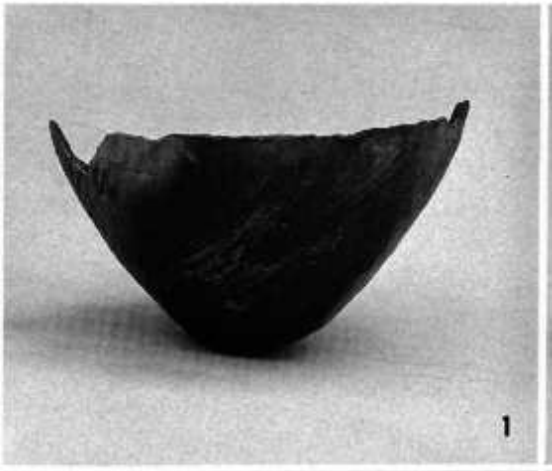
b. SD−101 掘り下げ状況

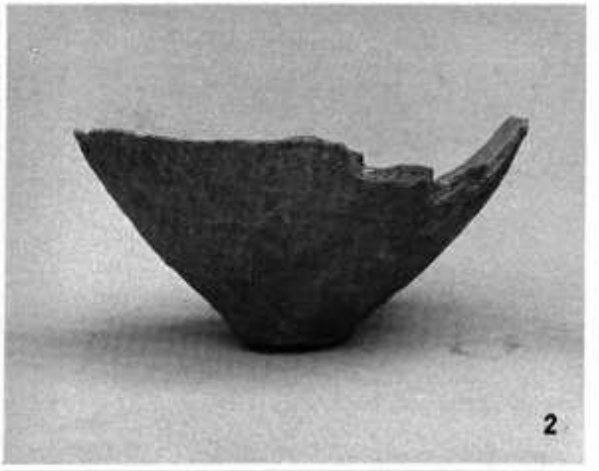
a. SD−105 完掘状況

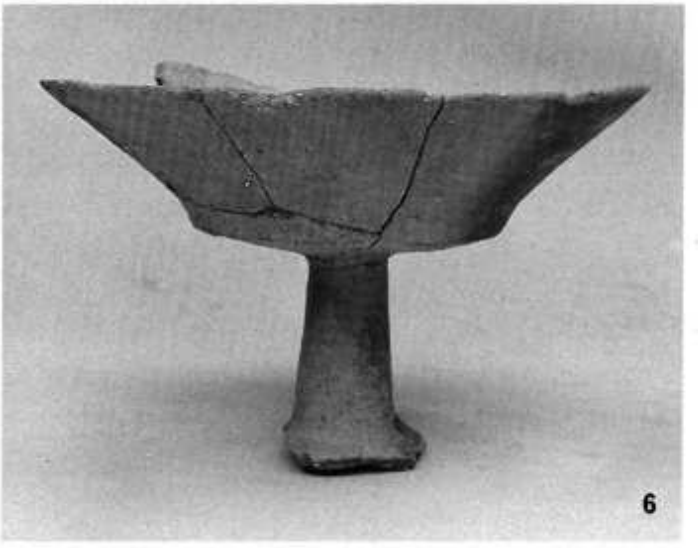
b. SD−106 完掘状況



1～7－SD－101 出土土器







1～6－SD－101 出土土器

昭和６１年度

黒田大塚古墳

第３次発掘調査概報

例　　言

1．本書は、田原本町教育委員会が昭和61年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字黒田所在、黒田大塚古墳の第３次発掘調査概報である。

2．発掘調査は、橿原考古学研究所の指導を得、田原本町教育委員会　社会教育課が実施した。現地調査は藤田三郎が担当した。

3．調査にあたっては、土地所有者である田村豊治氏に多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝します。

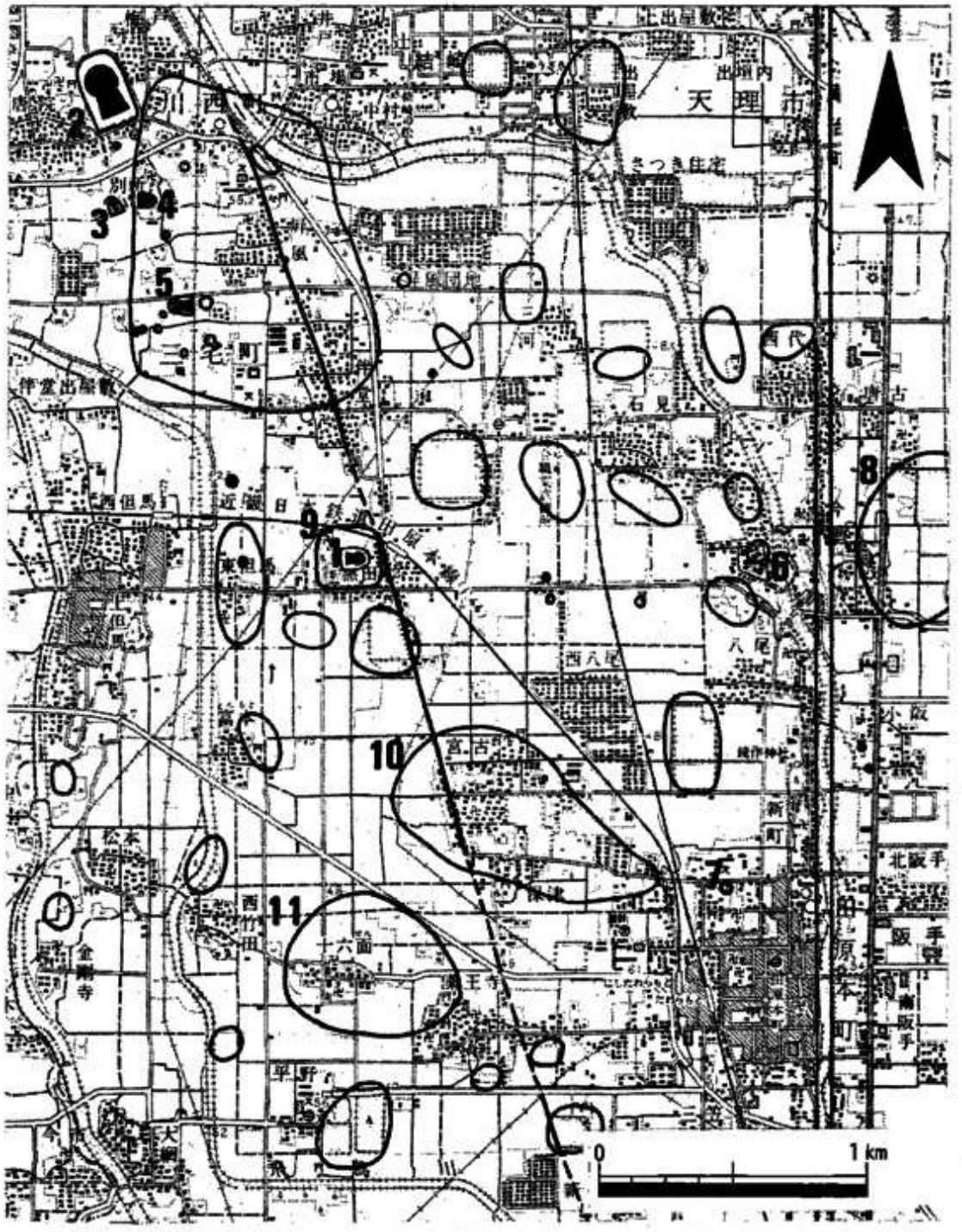
4．調査補助員として、加田隆志・豆谷和之・久山高史・古川秀幸・小林伸治（奈良大学）の学生が参加した。

　出土遺物の整理作業・概報作成にあたっては、豆谷和之・梅原一恵・河野典子の諸氏の協力があった。

5．本概報の執筆及び編集は、藤田がおこなった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 27
Ⅱ．調査の概要 …… 28
(1). 遺構 …… 28
(2). 出土遺物 …… 29
Ⅲ．まとめ …… 30



1．黒田大塚古墳
2．鳥ノ山古墳
3．寺ノ前古墳
4．安養院古墳
5．高山古墳
6．石見遺跡
7．羽子田遺跡
8．唐古・鍵遺跡
9．黒田遺跡・法楽寺跡
10．保津・宮古遺跡
11．十六面・薬王寺遺跡

第22図　黒田大塚古墳周辺遺跡分布図

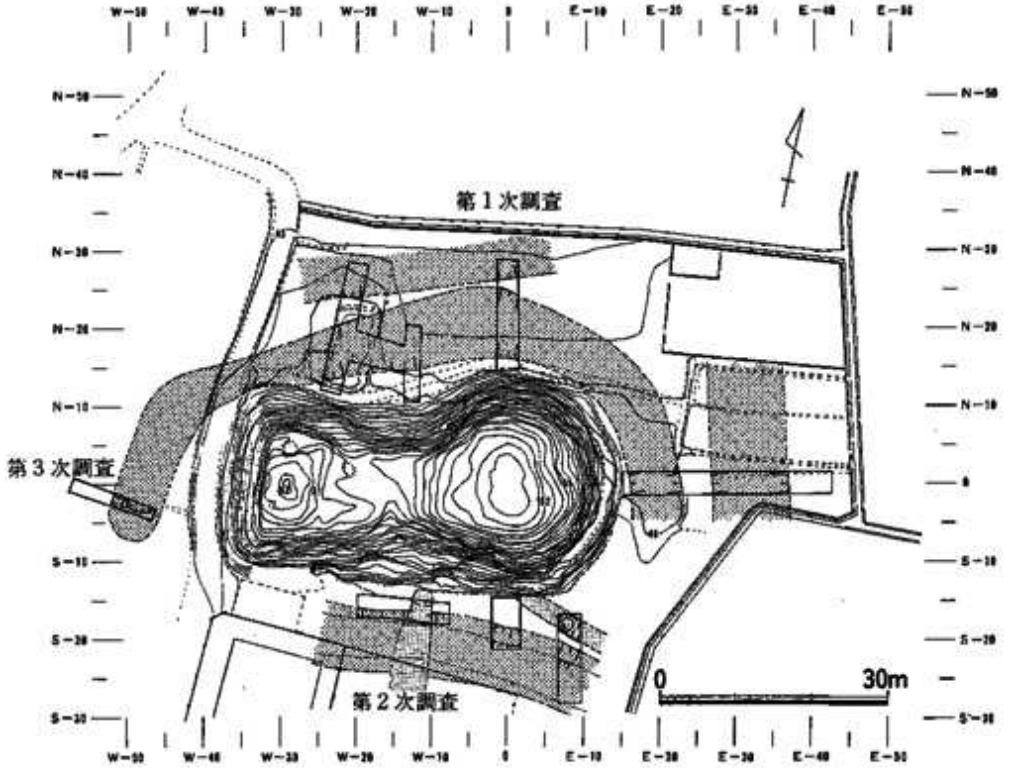
Ⅰ．はじめに

黒田大塚古墳は既に昭和58・59年度の二度にわたる墳丘周辺部の調査をおこなってきた。第1次調査は墳丘の北側と東側に5ヵ所、第2次調査では墳丘の南側に3ヵ所のトレンチを設定し、墳丘規模と周濠の確認をおこなった。これらの調査成果から、現墳丘は二段築成の一段目が削平を受けたものであることが判明した。また、周濠をもつことや埴輪、木製品を伴うことも新たな知見となった。さらに、この古墳は中世・近世の大溝に墳丘を削られながら、溝が古墳の周囲をめぐっている事実も判明した。これは古墳の西隣にある法楽寺や東隣にある近世屋敷跡との関係が注目されるのである。小規模な調査ながらも多大な成果をあげてきた。

さて、本年度は黒田大塚古墳の西側において住宅が新築されるにあたり、事前調査として第3次発掘調査をおこなった。調査地は古墳周濠部分にあたり、周濠と近世の大溝を検出することができた。これによって、古墳の全長、近世大溝の関連を明確にすることができた。

第5表

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第3次	田原本町 黒田346-1番地	住宅新築	宅地	田村豊治	1986. 6.11～ 6.18	約22㎡



第23図　近世大溝検出位置図

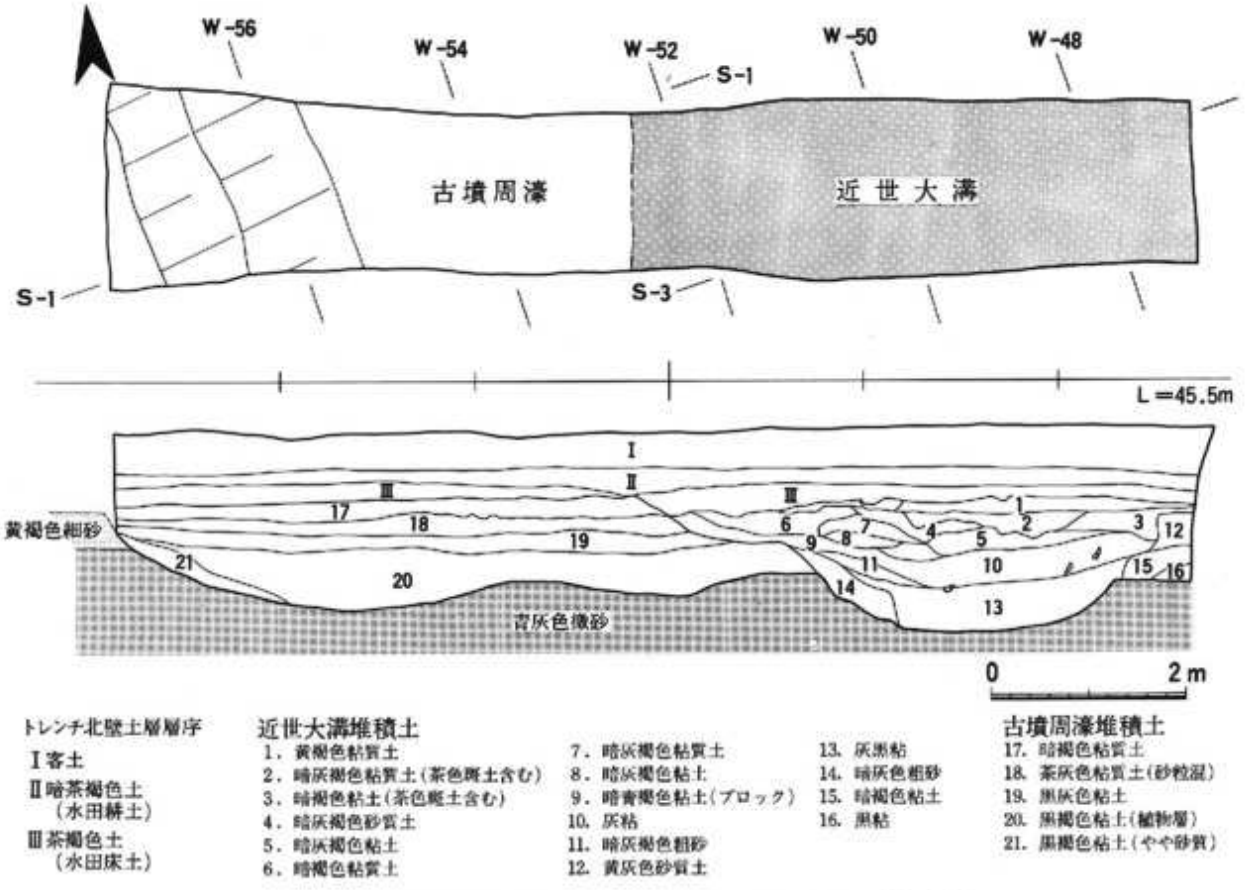
Ⅱ. 調査の概要

(1). 遺構

調査は対象地の北半でおこない、東西約11m、幅約2mのトレンチを1本設定した。調査地は前方後円墳の前方部にあたる場所で、古墳とは道路を挟んで反対側になる。調査当初から周濠にあたると思われた。調査の結果、近世大溝1条と古墳の周濠を確認することができた。また、周濠の外側の立ち上がりが検出でき、古墳の規模がおさえられることになった。

古墳周濠

周濠はトレンチの西半において検出した。トレンチの西端において周濠の外側の立ち上がりを検出したが墳丘側は近世大溝によって切られていた。残存する周濠の幅は 7.4mである。第1次調査における後円部側の周濠幅が推定8mであることから、墳丘側の立ち上がり部分のみが近世大溝によって切られたと思われる。これから墳丘の全長を復元すると、約70mの墳丘規模になることが判明した。さらに周濠を含めると約86mの規模を有することになる。今回検出した周濠は底面が平坦でなく、凹凸があるが深さ約1mを測る。堆積土層は約 0.6mの黒褐色粘土層(20層)や黒灰色粘土層等で自然堆積土層である。遺物は黒褐色粘土層から大形の円筒埴輪や土師器壺が検出されている。また、周濠肩付近からは先端が尖った棒状の木製品も出土している。



第24図 遺構平面図及びトレンチ北壁土層断面図 (S=1/60)

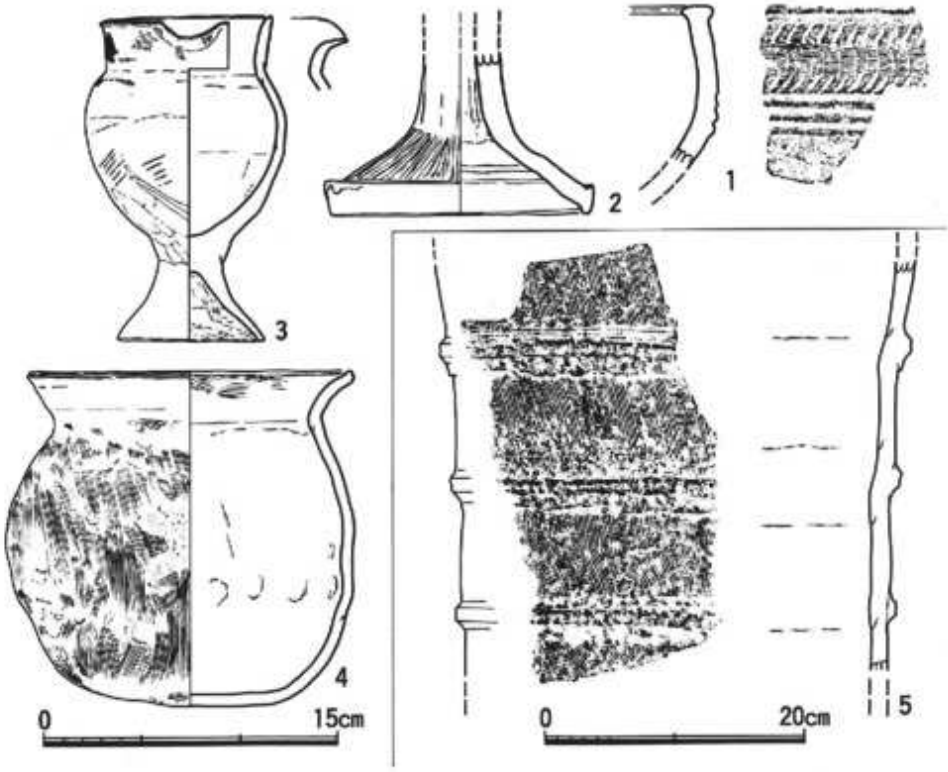
近世大溝

近世大溝はトレンチの東端で検出した溝で、ほぼ南北に走向する。溝の幅は6m以上（推定7m）、深さ 1.5m を測る。溝は段掘りで、溝の中位にテラスをもつ。また、溝はトレンチの南側で一段高くなっており、トレンチ南側で終束する可能性がある。溝の堆積は灰色粘土層等で形成されており、自然堆積土層である。遺物は円筒埴輪の他、瓦質土器、土師器が出土している。

本溝は墳丘の一段目をカットしながら掘削していることから、第1次調査で検出した近世大溝Ⅰと一連のものと考えられる。

(2). 出土遺物

第3次調査で出土した遺物は多岐にわたる。大半が古墳の周濠と近世大溝から出土している。遺物は時期的に大きく四つの時期のものに分別できる。一つは古墳が築造される以前の土器で、弥生時代前期から古墳時代前期のもの。二つ目は本来、古墳に伴っていた埴輪や須恵器、木製品である。三つ目は古墳の周濠が埋没する過程で破棄された土器類、四つ目としては近世大溝に伴う遺物群である。古墳周濠では1～3までの遺物群、近世大溝では全ての遺物群で構成される。これらのうち、埴輪が最も多い。注目すべきは縄文土器が1点含まれている。



第25図　古墳周濠出土遺物（1～4：S＝¼，5：S＝⅙）

弥生土器・古式土師器

弥生土器は第Ⅳ様式の土器がある。第25図－1は大形鉢の鉢部である。口縁部は内外に肥厚し、体部との界には3条の凹線をめぐらす。鉢部外面には櫛描列点を上下に配し、その間を簾状文でうめる。2は高杯脚部で、柱状の脚部に広がった裾部がつく。裾部はやや内湾ぎみに立ち上がる。裾端部は上方へ肥厚する。外面はケズリをおこなった後、ミガキを施す。内面はヨコナデがみられる。全体に器壁が厚い土器である。3は台付甕で、纒向1式に相当すると思われる土器である。小形の甕に脚台をつけている。脚台と甕の接合部には強いナデがみられる。体部下半には右上がりのタタキがみられるが、ナデで消されている。口縁部は上方へ立ち上がり、片口をつける。部分的にハケを施し、壺の口縁部に似ている。内面はハケ後ナデを施している。

円筒埴輪

円筒埴輪は無黒斑の大形品である。須恵質のものも含まれている。数点ではあるが、赤色顔料を塗布したものもみられる。出土した埴輪の多くは基底部を欠いている。第25図－5は口縁部と基底部を欠くもので、外面には粗い1次調整のタテハケが残っている。タテハケ後にタガを付けているが、タガは低い。外面の一部に赤色顔料が残っている。内面はナデ調整である。

土師器

第25図－4は甕である。平底にちかい形態で、体部はやや扁平になる。外面はタテハケを施すが、全体に火を受け、器面は剝落している。内面は丁寧にナデ調整をおこなっている。

木製品

図版22－3は古墳周濠より出土した木製品である。全長 140.3cm、基部幅 5.6cm、同厚さ 2.5cmを計る棒状木製品である。基部は両側に抉りをいれ、先端を尖らせている。

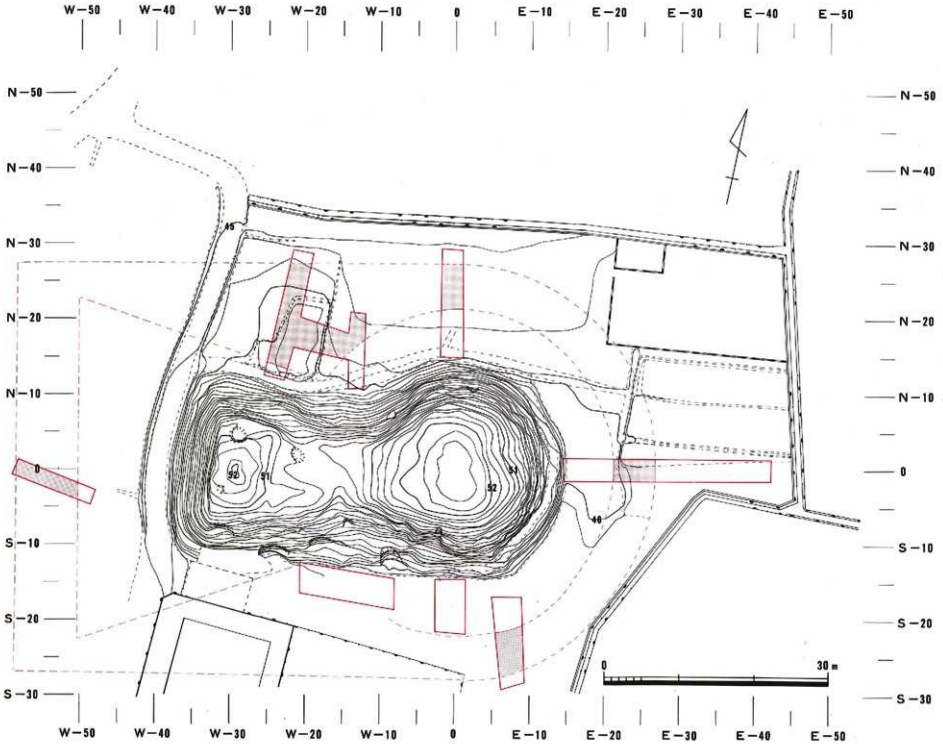
Ⅲ. まとめ

調査例の少ない三宅古墳群にあって黒田大塚古墳は最もその内容が明らかにされた古墳である。これまで三回にわたる古墳周辺の調査で、古墳の規模とその外容がほぼ解明された。残念ながら、今みる墳丘は一段目が近世大溝によって切られ、消失して一回り小さくなっている。この為、正確な規模はおさえられないが、復元すると第6表のようになる。周濠は馬蹄形で、幅8mを測る。

第6表 黒田大塚古墳の規模

	全長(周濠含)	墳丘全長	後円部径	後円部高さ	前方部幅	前方部高さ
規模(推定復元)	86m	70m	40m	8.2m	45m	7.7m

外堤についてはわからない。墳丘は前方部がかなり開く形態で、葺石はもっていない。埴輪は円筒・朝顔形・蓋形埴輪をもつ。また、かさ形・鳥形木製品も出土しており、埴輪といっしょに並べられていたと考えられる。主体部・副葬品は不明であるが、滑石製の双孔円板と管玉が第1次調査で出土している。以上が古墳について判明した点であるが、今後、古墳築造以前の弥生集落跡や古墳削平後の中・近世遺構との関連について把握していく必要がある。



第26図　黒田大塚古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図（S＝1/500）

黒田大塚古墳
図　版

図版19　黒田大塚古墳

遺跡空中写真（左が北）

a. トレンチ全景（西から）

b. トレンチ全景（古墳周濠完掘状況）